仲島遺跡 1

－第２次調査報告－

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1037集

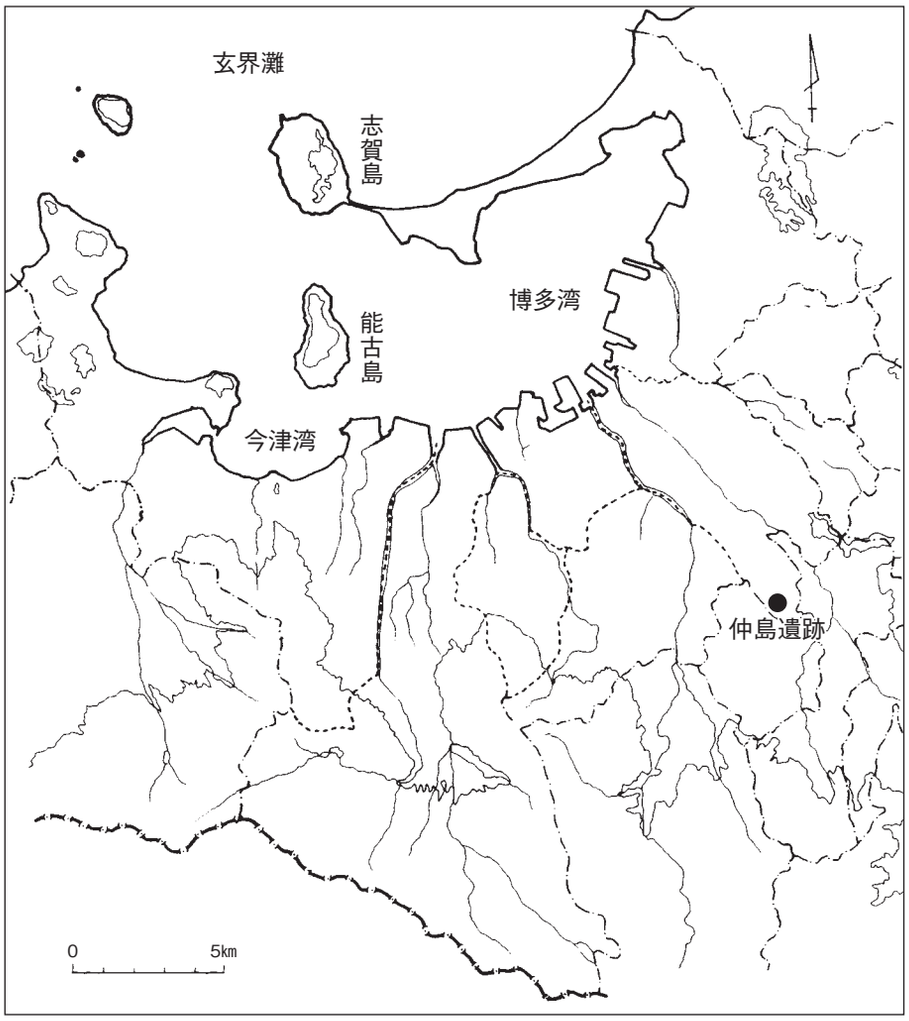
２００９

福岡市教育委員会

仲島遺跡 1

－第２次調査報告－

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1037集



調査番号 8332
遺跡略号 NKZ

２００９

福岡市教育委員会

調査区全景（北から）（南方の鞍部は二日市狭隘部）

調査区全景（北から）

序

福岡市は、玄界灘を通じた中国大陸との海路によって、古来より朝鮮半島はもとより中国や東南アジアとの歴史的な交易・文化交流の拠点として独自な発展を遂げた国際都市であります。

この長期間にわたる文化交流によって福岡市域には数多くの文化財が残されていますが、これらの貴重な文化財を保存し、将来に引き継いでいくことは現代に生きる私たちの義務であります。

しかしながら、現在を生きる人々にとって必要な様々な再生産活動と文化財保護との間に軋轢が生じていることも実情であります。

教育委員会では、諸々の開発によってやむを得ず失われていく埋蔵文化財について事業に先立って発掘調査を行い、遺跡の図面・写真類による記録保存に努めているところであります。

本書は、個人開発の倉庫建設に伴う福岡市博多区井相田所在の仲島遺跡の第２次緊急発掘調査についての報告書です。

仲島遺跡とその周辺の遺跡群は、奈良～平安時代の福岡平野で重要な集落の一翼を担った遺跡と考えられます。つきましては、この調査成果が今後の文化財保護への理解の一助となり、また学術研究資料としても活用いただければ幸いです。

最後に、発掘調査から報告書刊行に至るまで多大なご協力をいただきました関係者の方々に対し、心から深甚の感謝を申し上げます。

平成21年3月31日

福岡市教育委員会
教育長　山田　裕嗣

例　言

1．本書は、昭和58年７月４日から同９月11日に倉庫建設に伴い、発掘調査を行った仲島遺跡（博多区井相田２丁目４－３）の第２次調査報告書である。

2．本書に使用した遺構実測図の作成は、下村智（現別府大学教授）・横山邦継が行った。また、遺物実測図の作成は、横山の他に調査員 平川敬治が行った。

3．検出した遺構には、それぞれSC（竪穴住居跡）・ＳＢ（掘立柱建物）・SG（炉跡）・ＳＫ（土坑）・SD（溝状遺構）・SP（柱穴）の記号を付して区別した。

4．本書に使用した遺物類の整理は、整理作業員 副田則子、松田弘子、花田友美子、八代和美で行った。

5．本書に使用した遺構及び遺物のトレースは、職員の他、整理作業員 副田則子が行った。

6．本書で使用した遺構写真の撮影は、下村の他、横山が行った。

7．本書の編集・執筆は、横山が行った。

8．本書で遺構の出土状況に使用した方位は、全て磁北である。

9．本書にかかわる図面・写真・出土遺物などの資料は、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵される予定である。

本　文　目　次

第一章　はじめに…… 1
　１．調査に至る経過…… 1
　２．調査の組織…… 1
第二章　遺跡の立地と環境…… 3
第三章　調査の記録…… 5
　－調査概要－
　１．竪穴住居跡…… 6
　２．掘立柱建物…… 9
　３．土坑…… 12
　４．炉跡…… 13
　５．溝状遺構…… 17
　６．柱穴…… 35
　７．遺物包含層…… 36
　８．遺構検出面等出土遺物…… 40
第四章　おわりに…… 41

挿　図　目　次

Fig.1　仲島遺跡周辺遺跡分布図（1/25,000）…… 3
Fig.2　仲島遺跡調査地点図 …… 5
Fig.3　仲島遺跡遺構全体図（1/125）……（折り込み）
Fig.4　調査区土層断面図（1/80）……（折り込み）
Fig.5　SC01竪穴住居跡出土状況実測図（1/40）…… 6
Fig.6　SC01・02竪穴住居跡・SB03掘立柱建物出土遺物実測図（1/2・1/3）…… 7
Fig.7　SC02竪穴住居跡出土状況実測図（1/40）…… 8
Fig.8　SB01掘立柱建物出土状況実測図（1/40）…… 8
Fig.9　SB02掘立柱建物出土状況実測図（1/40）…… 9
Fig.10　SB03掘立柱建物出土状況実測図（1/40）…… 10
Fig.11　SB04掘立柱建物出土状況実測図（1/40）…… 10
Fig.12　SB05掘立柱建物出土状況実測図（1/40）…… 11
Fig.13　SK01・02・03・04土坑出土状況実測図（1/40）…… 12
Fig.14　SK03・04土坑出土遺物実測図（1/3）…… 13
Fig.15　SG01・02・03炉跡出土状況実測図（1/20）…… 13
Fig.16　SG01・02・03炉跡出土遺物実測図（1/2・1/3）…… 14
Fig.17　SD02・06溝出土遺物実測図（1/3）…… 15
Fig.18　SD06溝出土遺物実測図（1/3）…… 16
Fig.19　SD09・10溝出土遺物実測図（1/3）…… 18
Fig.20　SD10溝出土遺物実測図（1/2・1/3）…… 19

Fig.21　SD14・15・17・22・32・40溝出土遺物実測図（1/3）…… 21
Fig.22　SD15溝出土遺物実測図（1/1）…… 22
Fig.23　SP73・74柱穴出土遺物実測図（1/3）…… 23
Fig.24　Ⅱ・Ⅲ層出土遺物実測図（1/2・1/3）…… 24
Fig.25　Ⅳ層出土遺物実測図（1/3）①…… 25
Fig.26　Ⅳ層出土遺物実測図（1/3）②…… 26
Fig.27　Ⅳ層出土遺物実測図（1/3）③…… 27
Fig.28　Ⅳ層出土遺物実測図（1/3）④…… 28
Fig.29　Ⅳ層出土遺物実測図（1/2・1/3）⑤…… 30
Fig.30　包含層出土遺物実測図（1/3）①…… 31
Fig.31　包含層・一括・下層溝出土遺物実測図（1/3）②…… 33
Fig.32　遺構検出面出土遺物実測図（1/3）①…… 34
Fig.33　遺構検出面出土遺物実測図（1/2・1/3）②…… 35

図　版　目　次

PL.1　調査地点調査状況（北西から）（上方は二日市狭隘部）
PL.2　1．調査地区全景（北西から）
　　2．SC01住居跡出土状況（東から）
PL.3　1．炉１出土状況（北から）
　　2．炉２出土状況（西から）
　　3．炉３
　　4．炉４？（南から）
PL.4　1．SD06溝出土状況（北から）
　　2．SD14溝遺物出土状況（南から）
PL.5　1．SD17溝出土状況（南から）
　　2．SD17溝出土状況（北西から）
PL.6　1．SD17溝しがらみ出土状況（東から）
　　2．SD17溝しがらみ出土状況（西から）
PL.7　1．SD17溝しがらみ出土状況（南から）
　　2．SD17溝しがらみ出土状況（北西から）
PL.8　1．包含層土器類出土状況（南西から）
　　1．包含層土器類出土状況（北東から）

表　目　次

Tab.1　仲島遺跡調査一覧…… 2

第一章　はじめに

１．調査に至る経過

昭和56年２月17日付けで大野城市仲畑四丁目167番地の村上信幸之氏より福岡市博多区井相田二丁目４番地の３地内の事務所・工場新設計画についての事前審査申請（受付番号56-12-19）が文化課に提出された。

当該地は、古代～中世期の仲島遺跡に相当し、東側に隣接する大野城市市域と一体となる遺跡群を形成していると判断されたため、遺存状況の確認のために試掘調査が必要であるとした。

試掘調査は、同年２月20日に行った。試掘にあたっては、南北に長い対象地の南・北端に東西方向の２本のトレンチを設定して遺構の確認を行った。両トレンチでは、壁面で観察できる堆積の層序がほぼ一致しており、Ⅰ層（表土・－20～25㎝）、Ⅱ層（淡褐色粘質土・－40㎝）、Ⅲ層（茶褐色粘質土・－50～60㎝）、Ⅳ層（黒色粘質土）、Ⅴ層（灰褐色砂層もしくは八女粘土層）であった。

試掘溝のうち北側の第１トレンチではⅢ層上面で確認可能な溝状の遺構が南北に３条平行に見られ、幅はそれぞれ50・70・400㎝程度と考えられた。東側では念のために深く掘り下げたところ、Ⅲ層下にⅣ層、この下層が八女粘土層となっていたため面的（時期）に異なる遺構が検出される可能性が示された。また、南側の第２トレンチでは、第１トレンチよりも顕著な遺物包含層が認められ、この下層はⅣ層が東半部に見られる。この中には溝状に粗砂層が入り込んでいる部分見られ、遺構と考えられた。また、西側半分はⅤ層（灰褐色砂層）となっていて、東半部と区別が可能である。包含層は、厚い部分で約20㎝を測り、須恵器・土師器・瓦破片などを多量に含んでいる。

これらの試掘調査の成果を総合すると、建設対象地の東側で古代の竪穴住居跡、西側の低地では南北方向に走る溝群等が確認され、建築にあたっては事前の記録保存のための発掘調査が必要であると考えられた。

上記のような試掘成果をもとに地権者と協議を行い、開発にかかる全域が本格調査の対象であるとの合意に至った。対象地（1,060㎡）の本格調査は、昭和58年７月４日より開始し、大半が沖積地であり湧水が激しいことや大雨による遺構の水没などの悪条件はあったが、同９月11日までに無事終了した。

２．調査の組織

【調査主体】教育委員会　教育長　西津茂美
【調査総括】文化部長　中田宏
文化課長　生田征生
文化財係長　柳沢一男
【調査庶務】松延好文
【事前審査】田中寿夫
【調査担当】横山邦継、下村智
【調査作業員】赤星英子、穴井輝子、荒木君子、石本みすえ、岩尾澄子、大近麻子、岡本正枝、太田林、川辺満子、金堂融子、梶原チヨノ、片田江和子、加藤泰子、川崎セツ子、梶原三治、岸邦子、岸原藤雄、黒瀬千鶴、桑野正子、久保山二三子、栗田雅之、

古賀博子、児嶋絹子、河野房子、佐藤勝子、高野晧代、高木冴子、高田茂、
徳永ノブ子、舎川キチエ、中島智子、中嶋まきえ、永利咲江、西山秀子、西田幸子、
西本スミ、野口ミヨ、広田熊雄、福岡麗子、松浦ウメノ、宮田恵子、水間栄子、
三浦仁、村崎ゆう子、森山きよ子、山口光代、吉原京子

【整理調査員】平川敬治

【整理作業員】副田則子、松田弘子、花田由美子、八代和美

Tab. 1　仲島遺跡調査一覧

遺跡名	次数	調査番号	所在地	調査面積（㎡）	調査期間	担当者	報告書
仲島遺跡	1	７８１２	博多区井相田２丁目４－６	450㎡	1978.6.0－	柳田・柳沢	未刊
〃	2	８３３２	博多区井相田２丁目４－３	1,060㎡	1983.7.4－9.11	横山・下村	1037集
〃	3	８４０５	博多区井相田１丁目10－２	500㎡	1984.11.17－11.28	杉山	未刊

第二章　遺跡と立地と環境

仲島遺跡は、博多湾に向かって沖積地を広げる福岡平野の東辺を南北に貫流する御笠川の中流域左岸に広がる標高12m前後の低丘陵上に立地する。本遺跡は南北に長い形状をなすと考えられ、東側に隣接する大野城市側に広く範囲が広がっていると想定することができる。

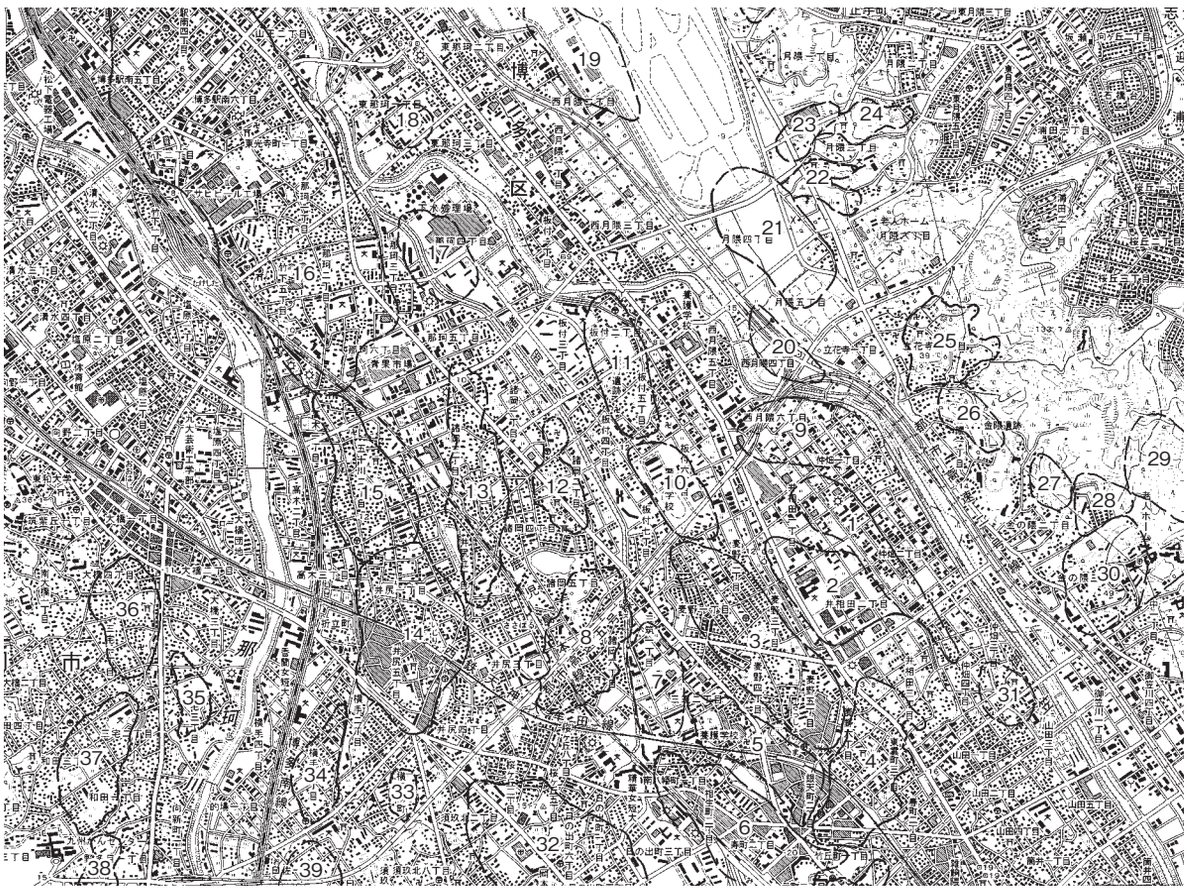
また、本遺跡を含む御笠川及び西側の那珂川とに挟まれた流域一帯には弥生時代以来の多くの遺跡群が形成されており、その密度や継続性は奴国時代から筑紫国に至るまでの長い繁栄と中心地たる由縁を直接に物語るものである。

周辺遺跡の状況を主要遺跡群で概観してみることとしたい。（**Fig.1**）

本遺跡の西側に広がる井相田Ｃ遺跡（**2**）では、これまで６次の調査が行われ、12世紀後半から13世紀を中心とした中世期の水田跡が広く遺存することがあきらかとなった他、８世紀前半から平安時代初期の倉庫を含む掘立柱建物群・竪穴住居跡・井戸・土坑・土壙墓・大溝を含む溝多数などが検出されている。また、弥生前期の生活遺構も遺跡の北辺で認められている。

また、遺物では古代の須恵器・土師器とともに人面墨書を含む墨書土器、木器、焼塩壷、権、カマド、瓦類や寛正五年（1464）銘のある中世末期の卒塔婆とともに池状遺構から出土した約4200点を越える柿経（教典は法華経）が特徴的である。

本遺跡は古代においては７世紀末～８世紀前半期を始まりとして10世紀まで継続した集落遺跡であ



1．仲島遺跡、2．井相田C遺跡、3．麦野A遺跡、4．麦野B遺跡、5．麦野C遺跡、6．南八幡遺跡、7．三筑遺跡、8．笹原遺跡、9．井相田D遺跡、10．高畑遺跡、
11．板付遺跡、12．諸岡B遺跡、13．諸岡A遺跡、14．井尻B遺跡、15．井尻A遺跡、16．那珂遺跡群、17．那珂君休遺跡、18．東那珂遺跡、19．雀居遺跡、20．立花寺B遺跡、
21．下月隈C遺跡、22．下月隈B遺跡、23．天神森遺跡、24．下月隈A遺跡、25．立花寺遺跡、26．金隈遺跡、27．影ヶ浦遺跡・古墳群、28．堤ヶ浦古墳群、29・30．持田ヶ浦古墳群、
31．川原遺跡、32．須玖遺跡群、33．寺島遺跡、34．横手遺跡、35．三宅C遺跡、36．大橋E遺跡、37．三宅B遺跡、38．野多目C遺跡、39．日佐遺跡

Fig.1　仲島遺跡周辺遺跡分布図（1/25,000）

り、これに伴う水田跡などは中世末期まで継続して営まれたことが知られる。

これらの西側には春日市須玖丘陵より延びてくる低位段丘が断続して連なり、その東側の先端が弥生初期の環濠集落である板付遺跡（**11**）である。また、その南側には古代廃寺や太宰府の水城東門より博多へ通じる古代官道と考えられる道路遺構が検出された高畑遺跡（**10**）、弥生前期の貯蔵穴群や古代集落の麦野A・B・C遺跡（**3・4・5**）が連なる。この北西側にも中世末の居館跡や一石一字経を出土した諸岡B遺跡（**12**）や弥生前期末期の朝鮮系無文土器を伴う生活遺構や中期のゴホウラ製貝輪を伴った甕棺墓地で知られる諸岡A遺跡（**13**）がある。

また、那珂川東岸には、弥生時代後期の青銅器鋳造跡遺構やガラス玉類の鋳型を出土した井尻B遺跡（**14**）やその北側に位置し、弥生前期末～古代・中世期のまとまった遺構が検出された五十川遺跡（**15**）、更にこの北側には弥生時代中期～後期の大集落遺跡で、奴国の拠点集落である那珂・比恵遺跡（**16**）が連なっている。仲島遺跡は古代前期を中心とした遺跡と考えられるが、その集落は太宰府官道の東道との繋がりや施行が水城築堤後と考えられている那珂郡条里の研究の上でも重要な位置を占める。

周辺遺跡報告書（既刊）

1.「板付遺跡」福岡市埋蔵文化財調査報告書第8・29・31・35・36・38・39・48・49・57・65・73・83・98・115・135・154・171・206・210・314・362・410・439・457・539・567・539・601・640・680・716・717・718集 1971～1992年調査

2.「井相田C遺跡」福岡市埋蔵文化財調査報告書第152・179・458・519・658・975集　1986～2007年調査

3.「麦野A遺跡」福岡市埋蔵文化財調査報告書第107・275・409・719・774・859・867集　1982～2007年調査

5.「麦野B遺跡」福岡市埋蔵文化財調査報告書第164・358・568集　1985～1996年調査

4.「麦野C遺跡」福岡市埋蔵文化財調査報告書第361・501・643・867・897・970集　1989～2007年調査

6.「南八幡遺跡」福岡市埋蔵文化財調査報告書第128・181・277・441・488・501・528・602・641・825・906・1007集　1932～2006年調査

10.「高畑遺跡」福岡市埋蔵文化財調査報告書第29・36・57・83・98・115・154・211・458・676・699・799・934集 1973～2002年調査

12.「諸岡A遺跡」福岡市埋蔵文化財調査報告書第1028集　1978～1983年調査

13.「諸岡B遺跡」福岡市埋蔵文化財調査報告書第29・31・36・49・57・65・83・98・154・108・489・776集 1972～2007年調査

14.「井尻B遺跡」福岡市埋蔵文化財調査報告書第111・175・411・412・441・529・571・644・645・678・721・736・787・788・834・918・923・973・974集　1971～2007年調査

15.「五十川遺跡」福岡市埋蔵文化財調査報告書第111・570・720・793・978・1019集・年報19　1978～2007年調査

16.「那珂遺跡」福岡市埋蔵文化財調査報告書第82・153・162・・222・253・254・267・291・292・323・324・363・364・365・366・367・398・399・454・455・500・518・525・563・564・597・598・638・639・659・672・673・674・713・714・715・756・800・801・802・841・842・・843・844・887・888・935・936・937・981・982・983・1021集　1974～2004年調査

16.「比恵遺跡」福岡市埋蔵文化財調査報告書第94・116・117・130・145・146・174・227・255・325・289・325・368・369・401・402・403・404・442・451・452・453・520・530・561・562・595・596・663・671・770・771・782・820・821・822・832・855・856・857・858・898・899・900・954・955・956・957・958・1000・1001・1002・1003・1004集　1938～2007年調査

18.「東那珂遺跡」福岡市埋蔵文化財調査報告書第400・460・636・637・959集　1993～2005年調査

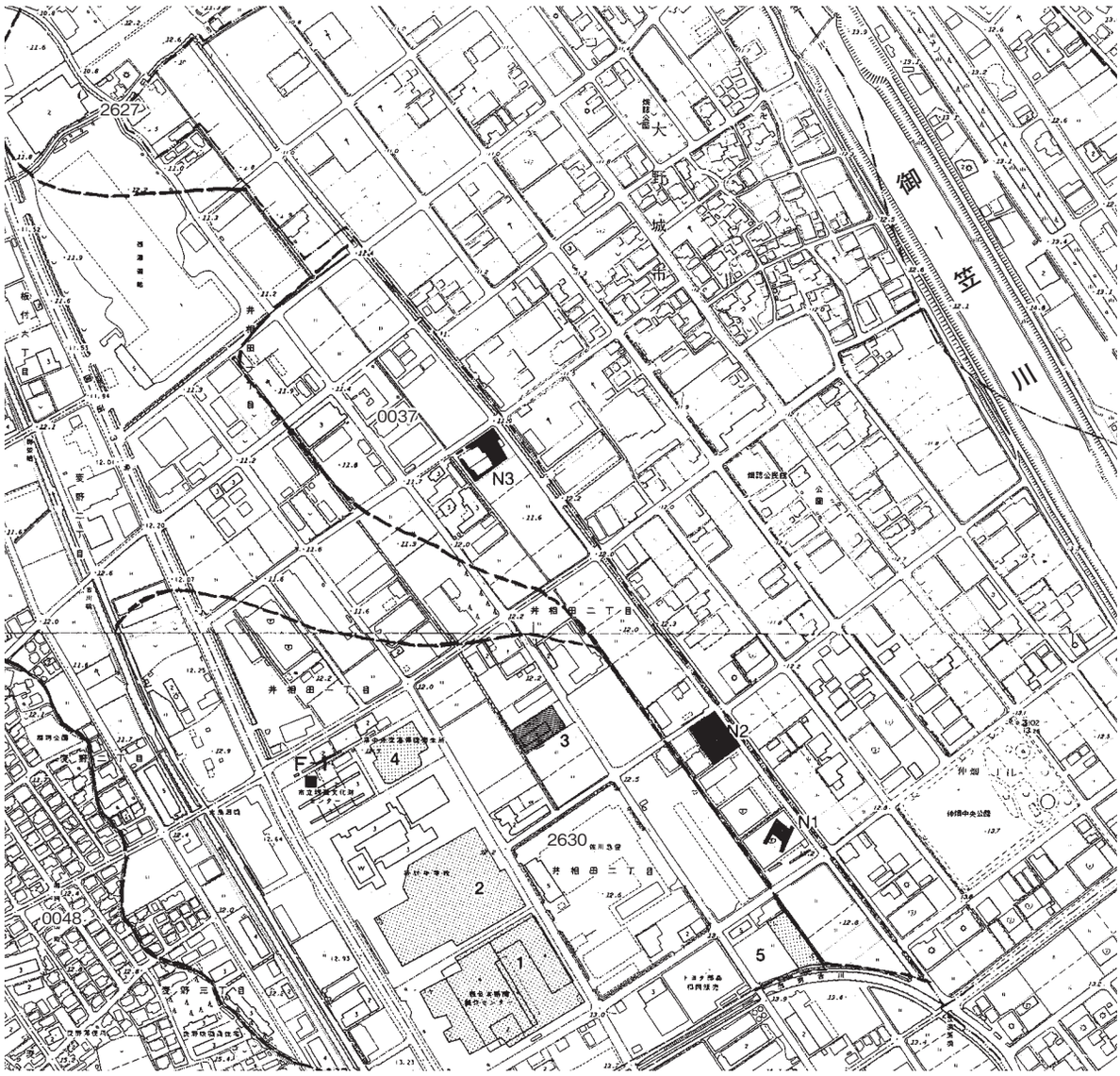
第三章　調査の記録

調査概要　調査地は、地山が東から西側へ緩く傾斜する地形にある。遺構は比較的密度濃く検出され、その主なものをあげると、方形の竪穴住居跡２軒、掘立柱建物５棟（１×１間－２棟、１×２間－１棟、２×２間－２棟)、不定型な土坑４基、炉跡３基、主として南北方向に走る溝状遺構40条、柱穴74個が知られる。

また、全体に遺物包含層が顕著に見られ、須恵器・土師器を中心に多くの遺物が出土している。これらの遺構は、時期的に殆どが６世紀末・７世紀初頭から８世紀の所産と考えられ、一部に緑釉陶器碗を伴う溝状遺構なども知られる。

また、殆どの遺構に伴う遺物では須恵器蓋杯・甕・ハソウ・高杯や土師器甕・鉢などの生活土器類が最も多く、他に手捏ね土器などの祭祀遺物も少量見られる。

更に、先にあげた８世紀代の溝遺構（SD15）からは、石製紡錘車や滑石製権や陶製の釣鐘状取手



0037：仲島遺跡，0048：麦野A遺跡，2627：井相田D遺跡，2630：井相田C遺跡
※N1・N2・N3は仲島１次・同２次・同３次である。

Fig.2　仲島遺跡調査地点図

をを持つ権などの特徴的な遺物も出土した。

以上のように本調査では、７世紀初頭から８世紀を中心とした該期の集落及び水田経営に関連する溝遺構等を検出したと言える。しかしながら、本調査地点は該期集落の中心ではなく、主体は本調査区の東・南側の低丘陵に展開するものと考えられる。

また、本遺跡は古代においては水城東門より出て博多に至る官道の近傍にあたる位置にあり、SD15溝より出土した越州青磁・各種権類などは何らかの官衙的施設の存在を想定させる。

１．竪穴住居跡（Fig.3・5～7、ＰＬ.2）

竪穴住居跡は、調査区の南東隅に２軒が検出された。いずれも小型の方形住居である。

SC01住居跡（Fig.3・5・6）

本住居跡は、隅角部が鈍い方形をなし、南壁は立ち上がりが緩い。床面には主柱穴４本を配する。また、西壁の中央には造りつけのカマドを置く。各部の規模は、東壁長2.6m・西壁長2.85m・南壁長24m・北壁長2.8m、壁の残存は良くないが、ほぼ15～25cmを測る。また、主柱穴は、径が30～40cm・深さ30cmの長円形をなす。覆土内からは須恵器蓋・高杯・鉢、土師器甕・甑、砥石類が出土した。

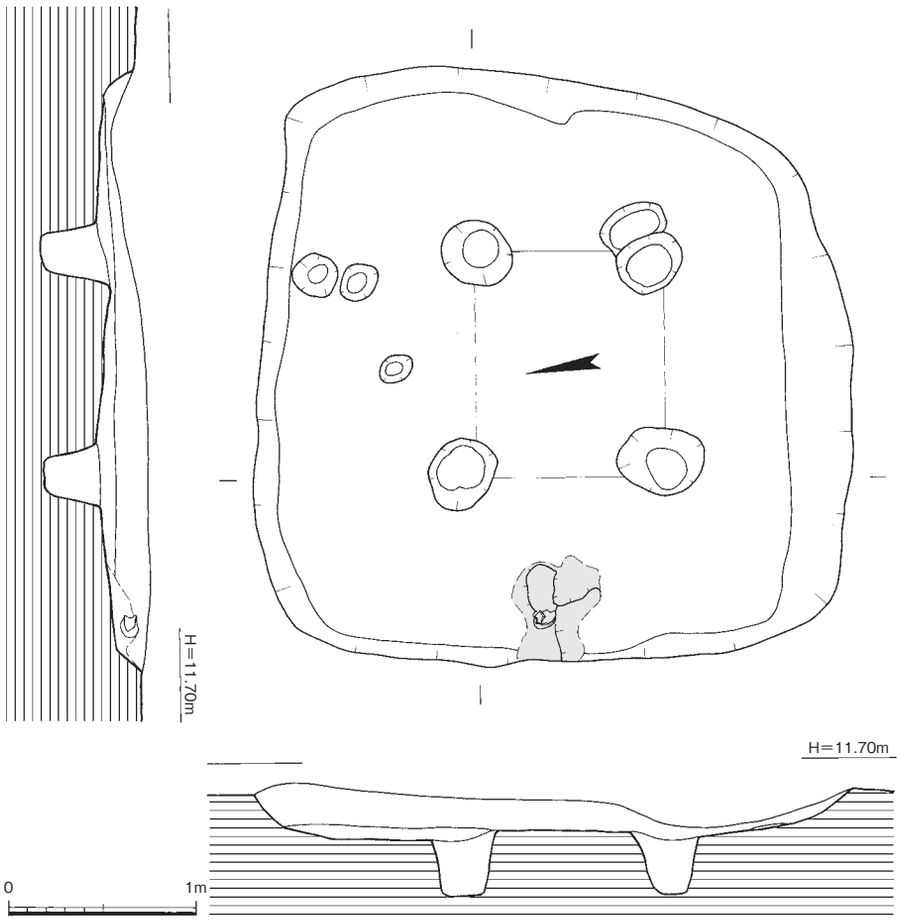


Fig.5　SC01竪穴住居跡出土状況実測図（１/40）

出土遺物（Fig.6）

00001は、小型の須恵器杯蓋である。天井頂部に一部ヘラケズリを残し、他はヨコナデである。天井部に「×」形のヘラ記号を付す。器色は、内外面共に青灰色を呈する。胎土は密で、黒色微粒を含む。焼成は堅緻である。口径11.6cm・器高3.8cmを測る。**00002**は、薄造りの須恵器鉢破片である。口縁の中位に２条の平行沈線を巡らす。調整は、底部にヘラケズリを加える以外はヨコナデである。器色は、灰～灰白色を呈する。口

Fig.3　仲島遺跡遺構全体図（1/125）

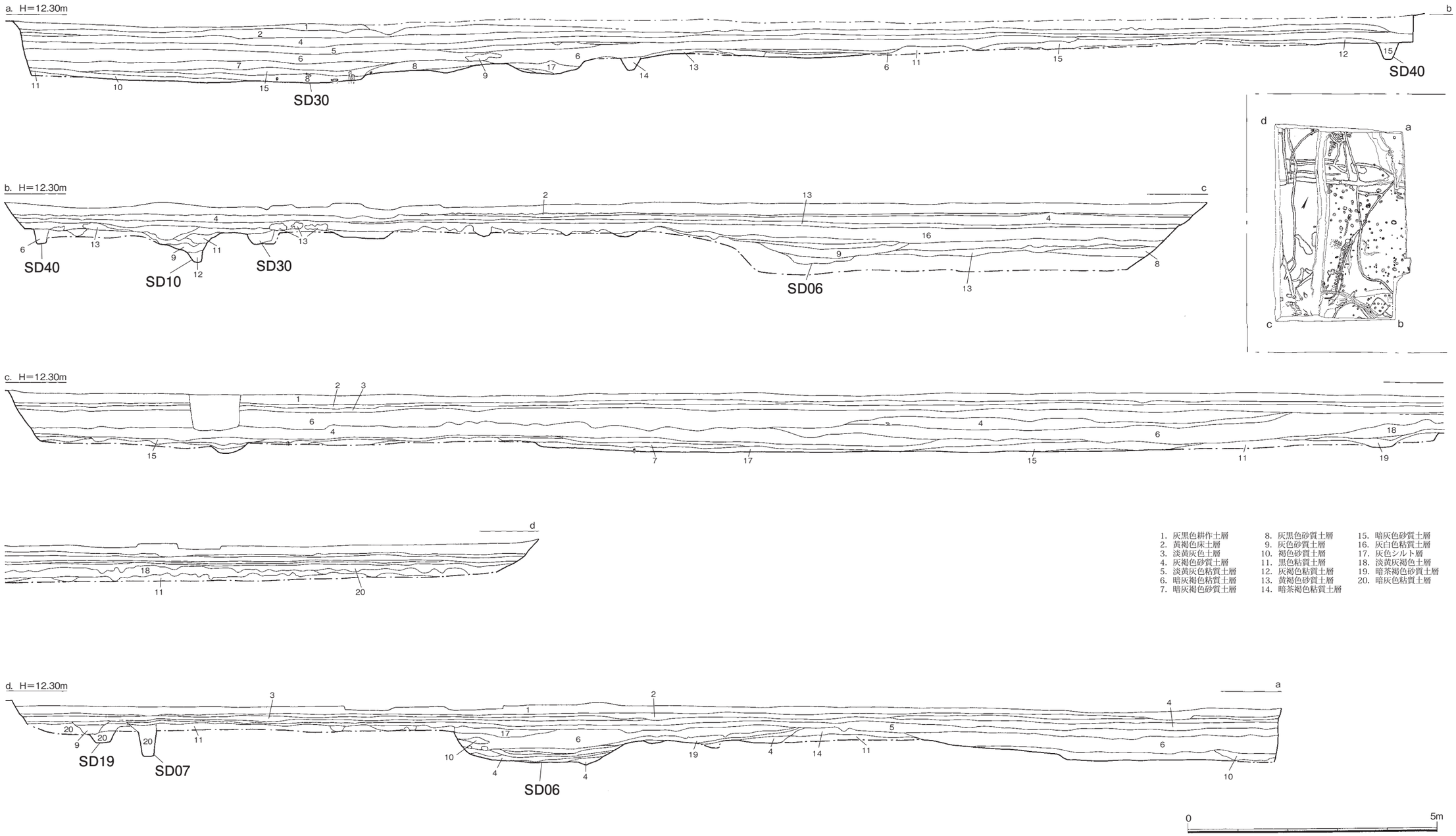


Fig.4　調査区土層断面図(1/80)

径は8.6cmを測る。**00003**は、短脚の須恵器高坏破片である。脚内面は灰カブリである。調整は、ヨコナデである。器色は、暗灰～灰白色を呈する。胎土は密である。

00004は、土師器甑の底部破片である。器色は、にぶい橙色である。胎土は密で、焼成も堅緻である。**00005**は、小型の土師器甕である。口縁は、緩やかに「く」字形に外開する。調整は、口縁がヨ

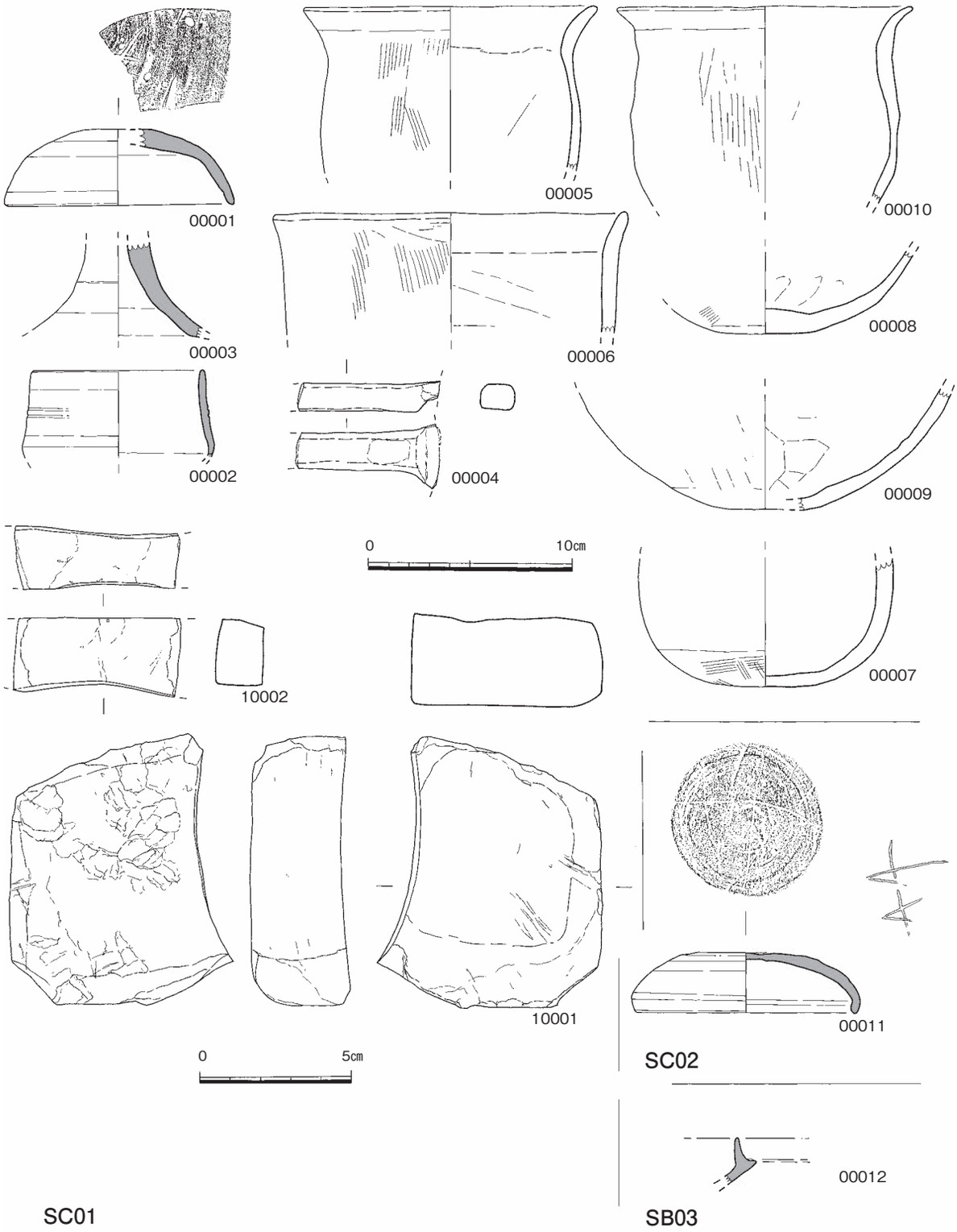


Fig.6　SC01・02竪穴住居跡・SB03掘立柱建物出土遺物実測図（1/2・1/3）

コナデで、外面にタテハケメ・内面にヘラケズリを残す。器色は、明赤褐～橙色である。胎土は粗で、焼成は堅緻である。口径は14.8cmを測る。**00006**も土師器甑破片である。調整は、口縁がヨコナデで、外面荒いタテハケメ・内面ナナメヘラケズリである。器色は、外面が灰褐色で、内面はにぶい橙色を呈する。胎土は粗で、焼成は堅緻である。復原口径は17.6cmを測る。**00007**は、土師器鉢？破片である。丸底である。器色は、内外面共に褐灰色を呈する。胎土は粗である。

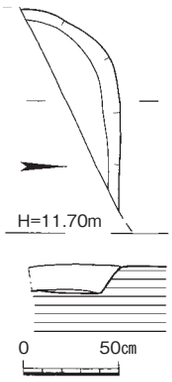


Fig.7　SC02竪穴住居跡出土状況実測図（1/40）

カマド内出土。00008は、土師器甕の底部破片である。器面の剥落が著しい。内面にヘラナデが残る。器色は、外面が灰白～橙色で、内面はにぶい橙色である。胎土は密である。カマド内出土。**00009**も土師器甕破片である。調整は、外面にナナメハケ、内面にヘラケズリを残す。器色は、外面がにぶい赤橙色で、内面は褐灰色を呈する。胎土は粗である。カマド内出土。**00010**は、小型の土師器甕破片である。調整は、口縁がヨコナデで、外面にタテハケメ・内面に細かいヘラケズリを加える。器色は、にぶい橙色～黄灰色を呈する。カマドに使用の土器である。**10001**は、砂岩使用の砥石・敲石兼用の石器である。周辺部は良く研ぎこまれ、裏面には打痕が著しい。長さ・幅・厚さが8.9×7.4×2.3cmで、重さは278gである。

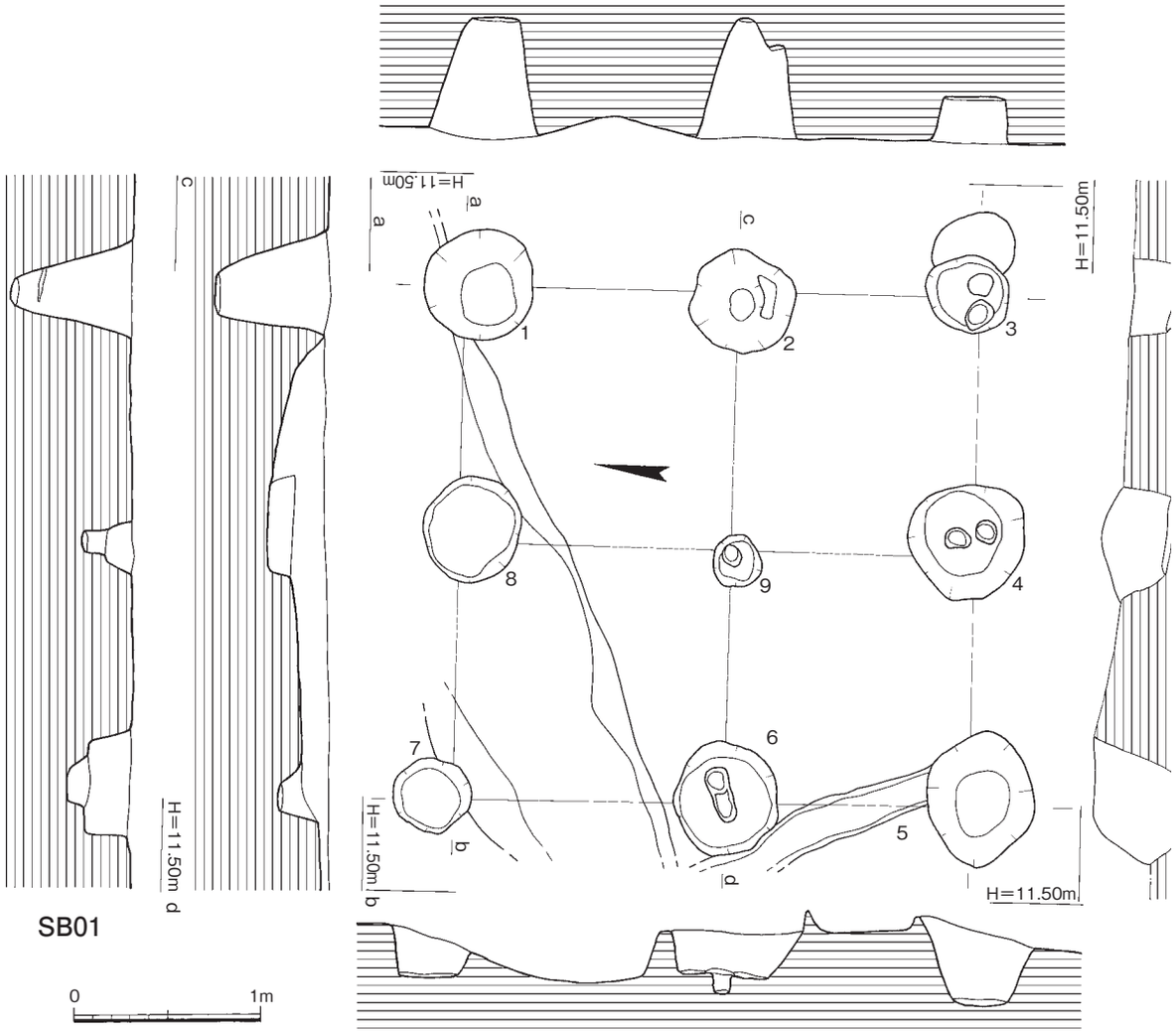


Fig.8　SB01掘立柱建物出土状況実測図（1/40）

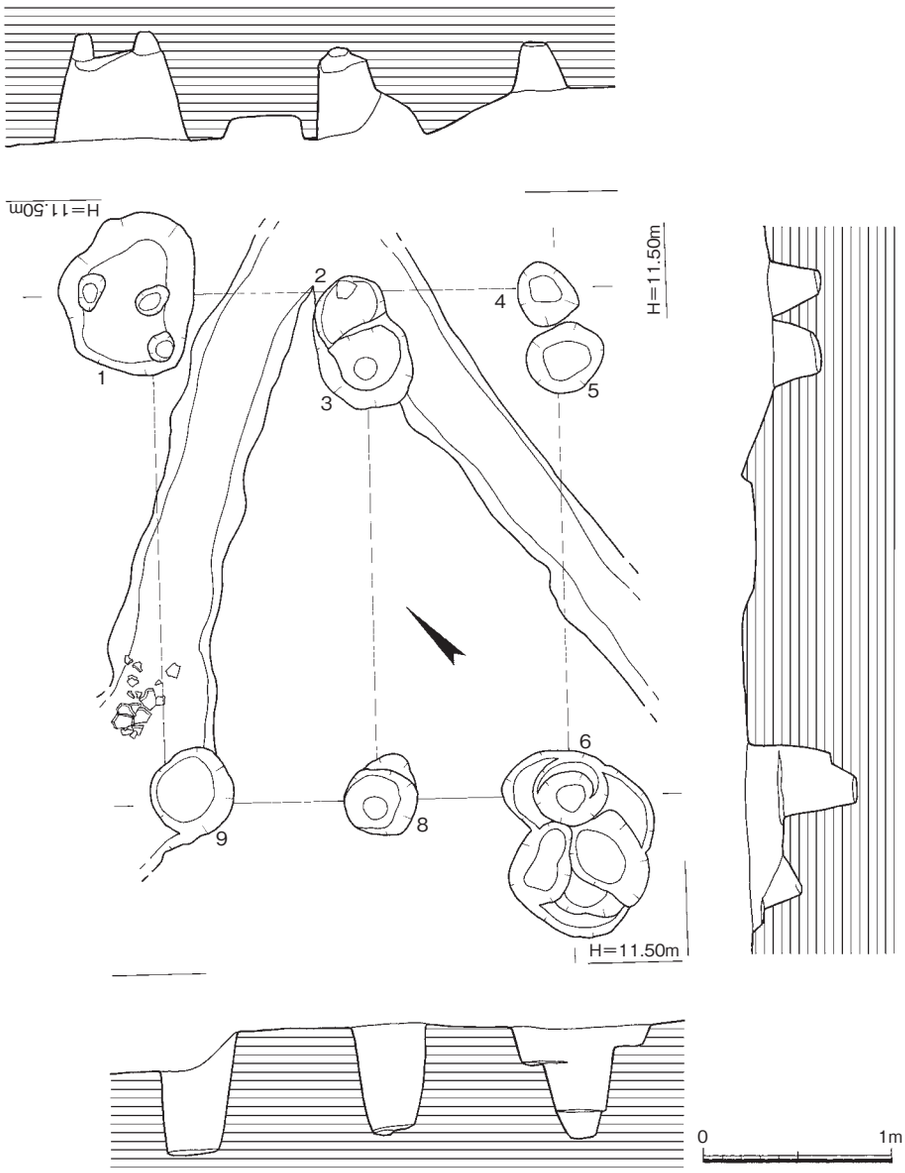


Fig.9　SB02掘立柱建物出土状況実測図（1/40）

10002は、花崗岩を使用する小型の砥石である。両端部を破損する。残存長5.5cm・重さ44gを測る。

SC02住居跡（Fig.3・6）本住居跡は、調査区外が殆どで、コーナー一ヶ所を検出したにすぎない。北壁長1m以上・西壁長0.5m以上、深さ0.2m程度を測る。

出土遺物（Fig.6）

00011は、小型の須恵器杯蓋である。口縁端部がやや内側に折れる。天井部の頂部にヘラケズリを加え、他はヨコナデである。器色は、外面が青灰色で、内面は灰白色を呈する。天井部に「+」形のヘラ記号を２ヶ所付す。胎土は密で、焼成も堅緻である。口径は11cm・器高3cmを測る。

２．掘立柱建物（Fig.3・8～12）

SB01建物（Fig.3・8）

本建物は、調査区ほ中央、やや北寄りで検出された２×２間規模の正方形東西棟建物である。柱配りは総柱の建物で、倉庫と考えられる。柱穴の掘方はいずれも円形である。掘方規模は、柱穴１では径0.6m・深さ0.65m、柱穴２では、径0.55m・深さ0.6m、柱穴３では0.4×0.5m・深さ0.25mを測る。また、柱穴４では、径0.6m・深さ0.35m、柱穴５では、0.6×0.75m・深さ0.5m弱、柱穴６では、径0.5×0.6m・深さ0.5m、柱穴７では径0.4m・深さ0.25m、柱穴８では、径0.5×0.55m・深さ0.15m、中央部の柱穴９はやや小型で、径0.25m・深さ0.25m程度を測る。掘方内のうち、柱穴３・４・６では径0.1～0.15m程度の柱痕跡が見られる。柱穴の心身間距離は、ほぼ2.58m程度である。SD06溝と重複

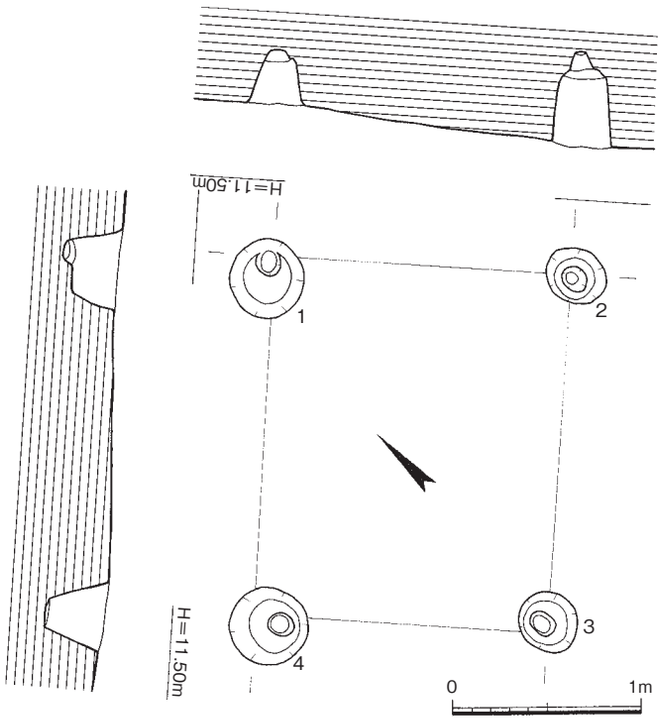


Fig.10　SB03掘立柱建物出土状況実測図（1/40）

し、これより後出の時期と考えられる。柱堀方に伴う遺物は出土していない。

SB02建物（Fig.3・9）

本建物は、調査区の東壁近くで検出された１×２間規模の小型東西棟建物である。建物の掘方は、SD08溝・SD14溝及びSB05建物掘方と重複しており、これらよりも後出の時期と考えられる。

柱穴の掘方は、いすれも円形をなす。建て替えによるものか重複する掘方を含めると９個が見られる。

柱穴の掘方はいずれも円形である。掘方規模は、柱穴１で径0.7×0.85m・深さ0.45m、柱穴２では、径0.35m・深さ0.3m、柱穴３では、径0.5m・深さ0.25m、柱穴４では、径0.35m・深さ0.25m、柱穴５では、径0.35m・深さ0.25m、柱穴６では、径0.4m・深さ0.6m、柱穴７では、径0.5m程度・深さ0.3m、柱穴８では径0.8m・深さ0.6m、柱穴９では径0.5m・深さ0.6mを測る。また、掘方内では柱痕跡が見られ、径0.1m程度である。柱穴掘方からは時期を示す遺物は出土していない。

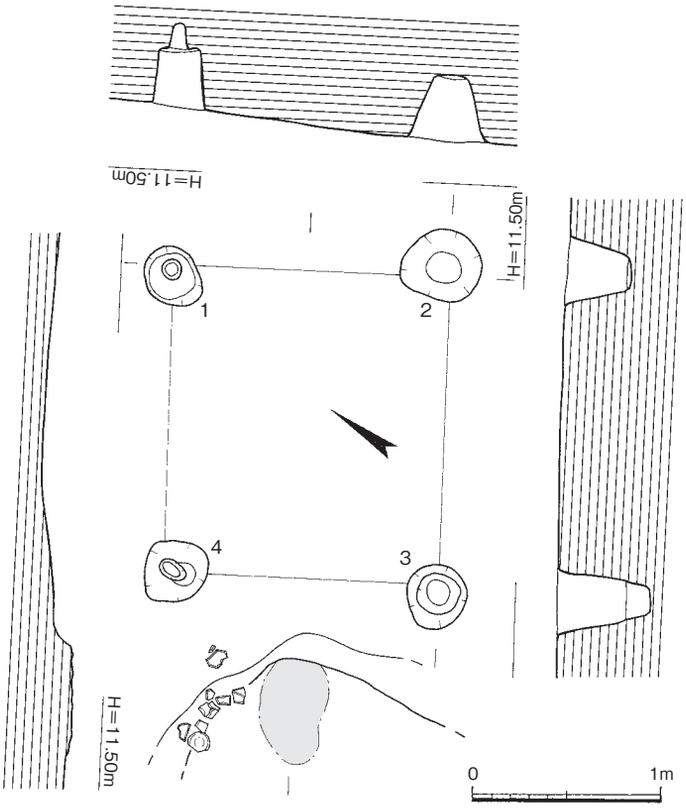


Fig.11　SB04掘立柱建物出土状況実測図（1/40）

SB03建物（Fig.3・6・10）

本建物は、調査区の東側でSB04建物とともに検出された１×１間の小型建物である。柱穴の掘方はいずれも円形である。その規模は、柱穴１で径0.4m・深さ0.3m、柱穴２では、径0.3m・深さ0.45m、柱穴３では、径0.3m・深さ0.3m、柱穴４では、径0.4m・深さ0.3mを測る。柱掘方内には柱痕が見られ、径0.1m程度である。梁間・桁行は1.6×1.9m規模である。柱穴３内より土師器（赤焼軟質須恵器）杯身の小破片が出土した。

出土遺物（Fig.6）

00012は、小型杯身の小破片である。受け部の立ちあがりは小型で、低い。器色は、にぶい橙色を呈する。胎土は密で、茶色の粒子を含む。焼成は堅緻である。

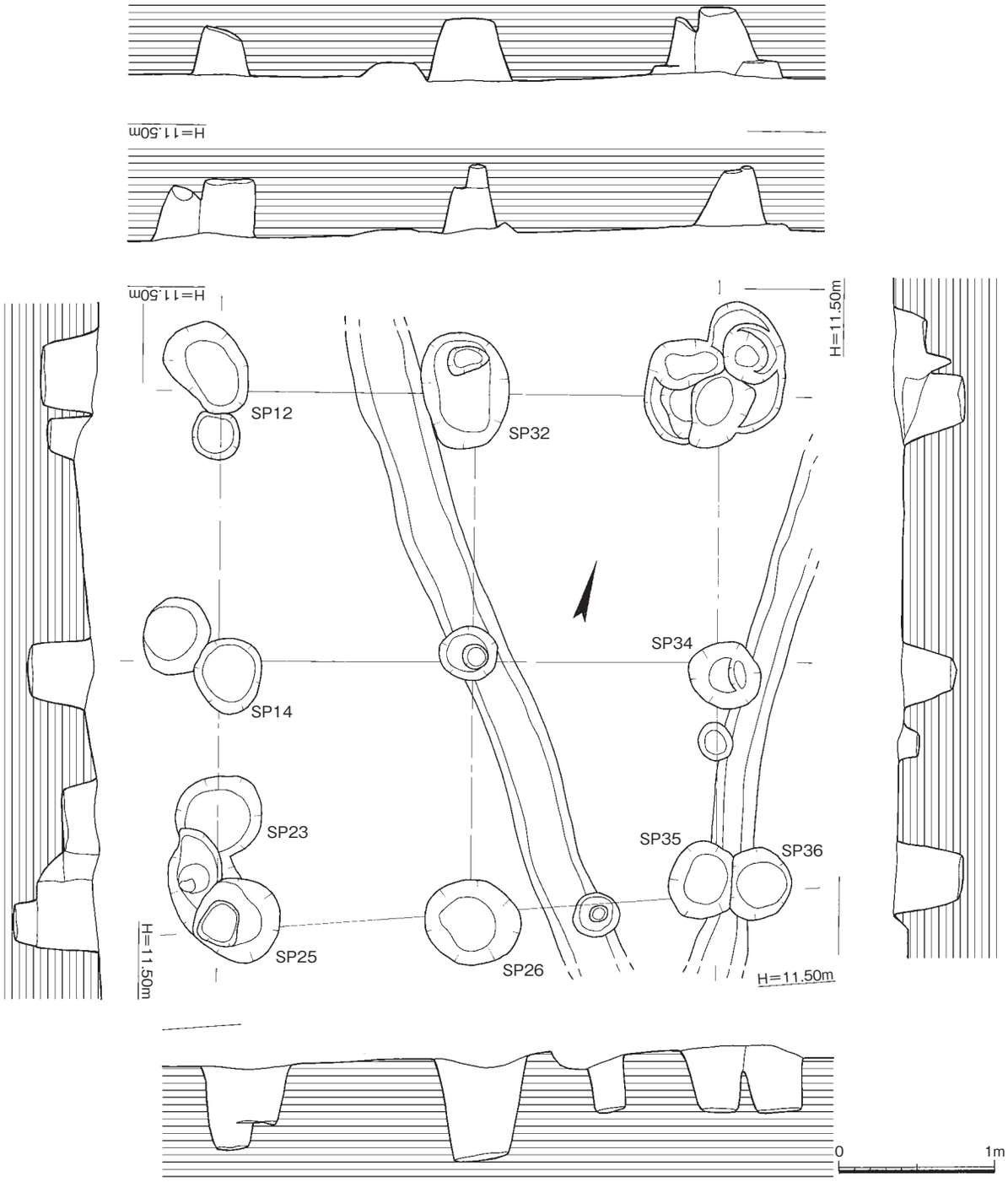


Fig.12　SB05掘立柱建物出土状況実測図（1/40）

SB04建物（Fig.3・11）

本建物も調査区東側でSB03と近接して検出された１×１間の小型建物である。柱穴掘方はいずれも円形である。その規模は、柱穴１で径0.3m・深さ0.3m、柱穴２で径0.4m×0.35m・深さ0.3m、柱穴３で径0.3m・深さ0.5m、柱穴４で径0.3m・深さ0.4mを測る。掘方内には柱痕跡が認められ、径0.1m程度を測る。梁間・桁行は心身で1.5×1.6m規模である。柱穴の掘方内からは時期を示す遺物の出土は無かった。

SB05建物（Fig.3・12）

本建物は、調査区中央で検出された２×２間規模の南北棟建物である。柱穴掘方はいずれも円形である。SD08溝・SD13溝及びSB02建物と重複しており、両溝よりは新しい時期の所産と考えられる。掘方は、SP12・SP32・SP34・SP36・SP26・SP25・SP14等がこれにあたる。掘方の形状から数回の建て替えが想定される。梁間・桁行は、心身で3.2m×3.6m規模と考えられる。掘方に伴う遺物の出土は無かった。

３．土坑（Fig.3・13・14）

SK01土坑（Fig.3・13）

本土坑は、調査区の北側壁近くで検出された不整形の土坑である。長辺長で4.9m・短辺長2m・深さ0.15～0.3mを測る。ＳＤ13及びＳＤ16溝に切られる。埋土内からの遺物の出土は無かった。

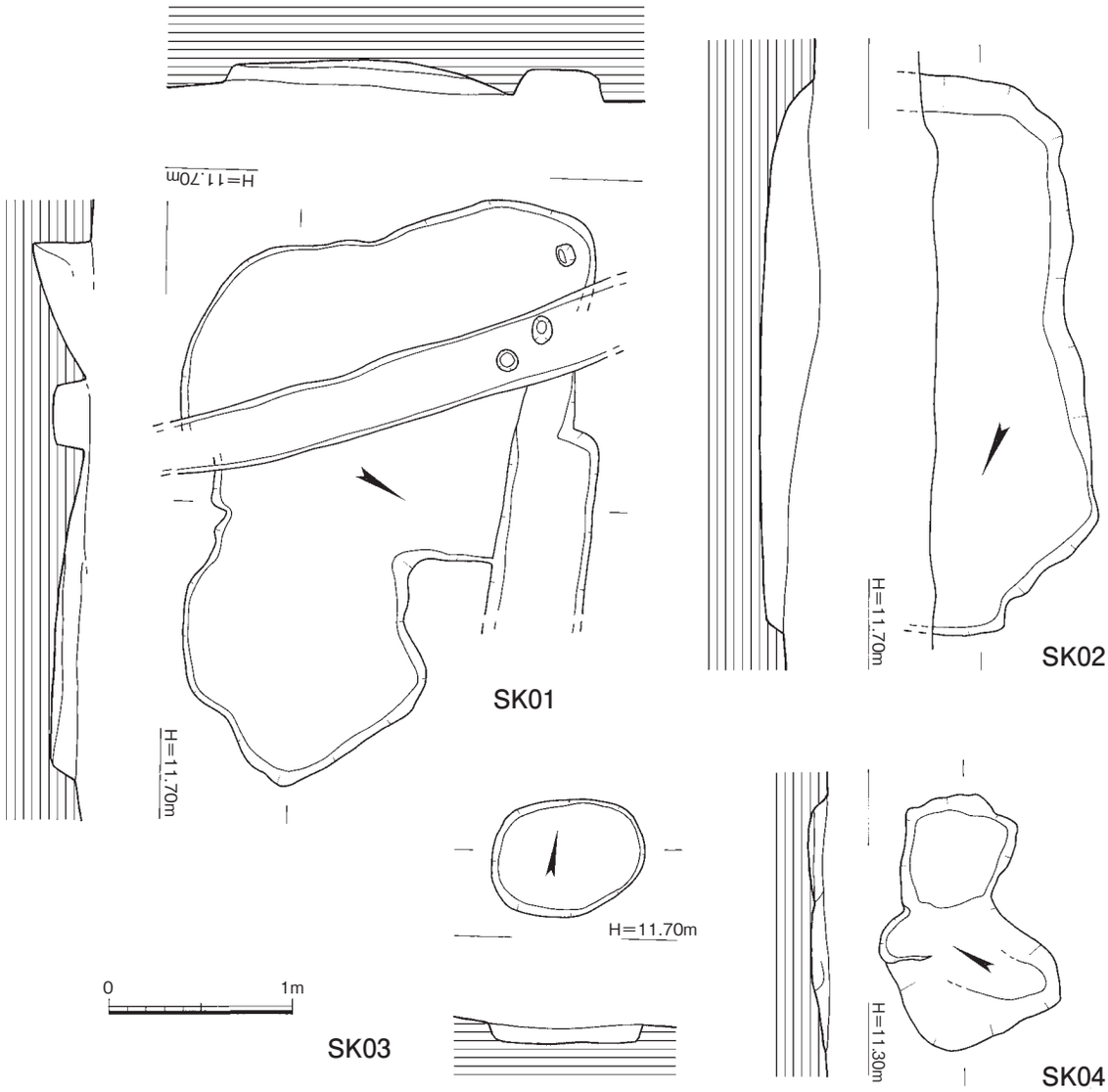


Fig.13　SK01・02・03・04土坑出土状況実測図（1/40）

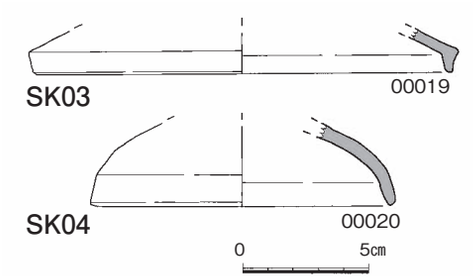


Fig.14　SK03・04土坑出土遺物実測図（1/3）

SK02土坑（Fig.3・13）

本土坑は、調査区のほぼ中央部で検出された長方形土坑で、大溝のSD06溝に切られる。長辺長が約3mで、短辺長0.9mを測る。また、深さは0.3m程度を残す。時期を示す遺物の出土は無かった。

SK03土坑（Fig.3・13・14）

本土坑は、調査区の東壁近くで検出された長円形の小型土坑である。規模は、長径が0.8m・短径0.7mで、深さは0.1m程度を残す。壁は緩やかに皿状をなす。埋土内から須恵器杯蓋の小破片が出土している。

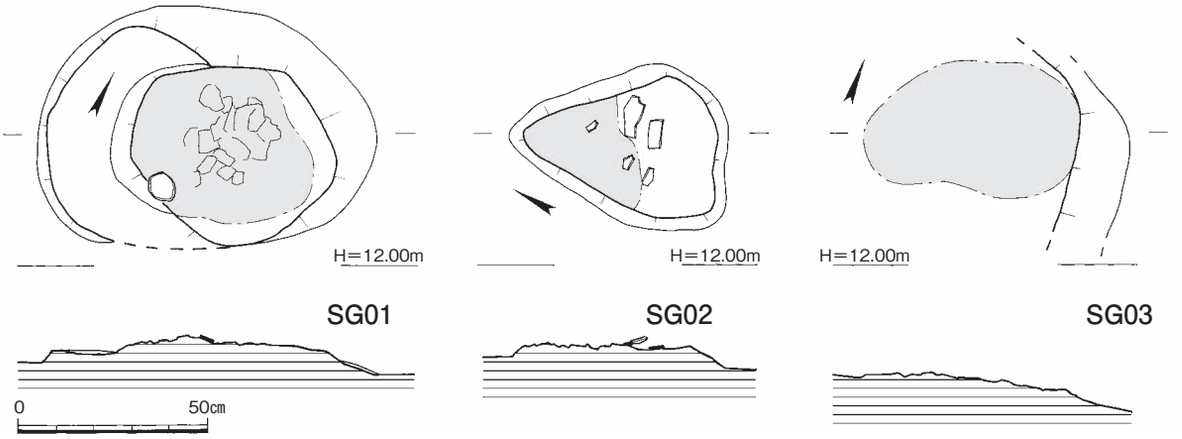


Fig.15　SG01・02・03炉跡出土状況実測図（1/20）

出土遺物（Fig.14）**00019**は、口縁端部が嘴状に折れる須恵器蓋の小破片である。器面調整は、全面ヨコナデである。器色は、内外面共に青灰色を呈する。胎土は密で、焼成も堅緻である。口径16.8㎝を測る。

SK04土坑（Fig.3・13・14）

本土坑は、調査区の南西隅で検出した不整形の浅い小型土坑である。規模は、長辺長が1.4m以上で、短辺長1mを測る。また、深さは0.1m程度である。埋土内からは須恵器杯蓋破片が出土した。

出土遺物（Fig.14）**00020**は、口縁端部の丸い小型の蓋である。器面調整は、内外面共にヨコナデである。器色は、外面が赤色で、内面は明紫色を呈する。胎土は密で、焼成も堅緻である。復原口径は12.2㎝を測る。

4．炉跡（Fig.15・16、PL.3）

SG01炉跡（Fig.3・15・16）

本炉跡は、調査区の東南側で検出した。規模は、上面長0.75m・同幅0.45mで、高さ0.1m程の高まりである。中央部には土師器甕破片や焼土片・炭化物が堆積している。竪穴住居の作り付け炉の可能性もある。

出土遺物（Fig.16）**00013**は、面取りが見える柱状の土製品である。器色は、にぶい黄橙色を呈する。胎土は密で、焼成は軟質である。残存長8.9㎝を測る。

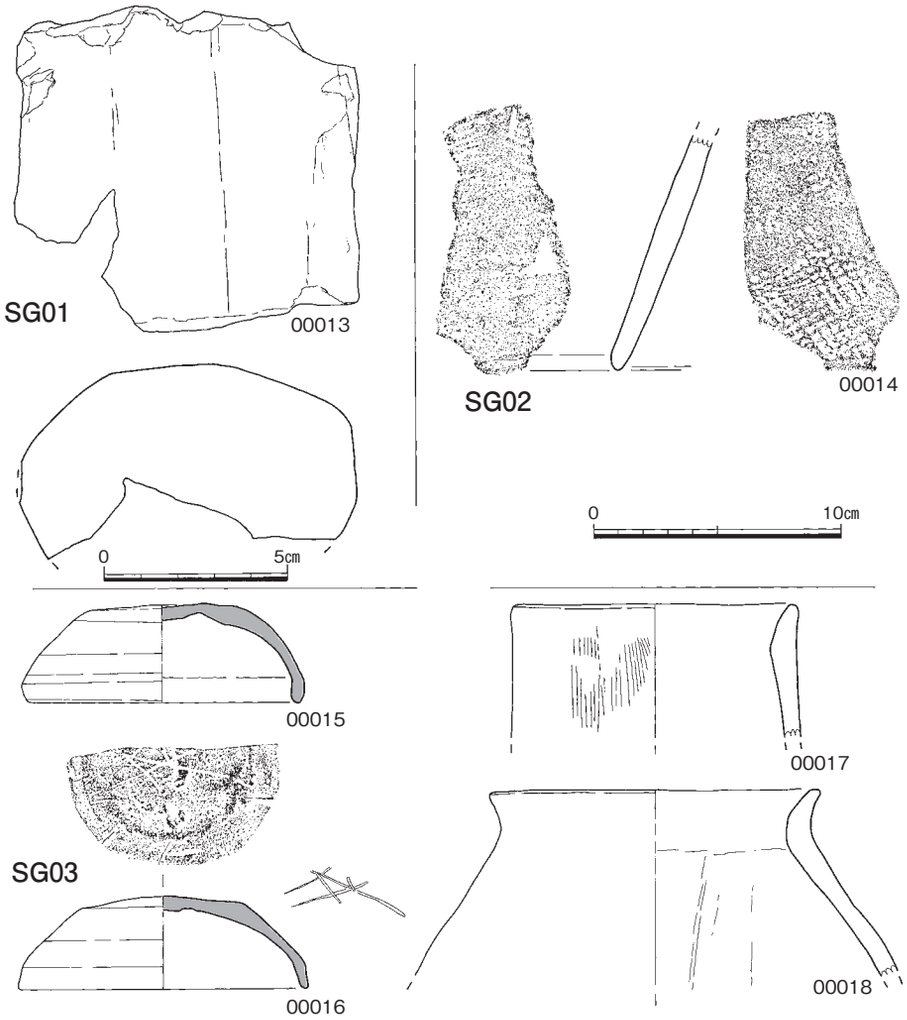


Fig.16　SG01・02・03炉跡出土遺物実測図（1/2・1/3）

SG02炉跡

（Fig.3・15・16）

本炉跡も調査区東南側で検出した。規模は、上面長0.5m・同幅0.35mで、高さ0.1mの高まりである。中央部に炭化物や土師器破片が混在する。

出土遺物

（Fig.16）**00014**は、土師器甑の底部破片である。調整は、外面に格子目タタキを施し、内面はヘラケズリである。器色は、外面が灰褐色で、内面は灰白色である。胎土は粗で、焼成は堅緻である。

SG03炉跡（Fig.3・15・16）

本炉跡は、ＳＢ04建物の西側に近接する位置で検出された。規模は、長辺長が0.55m・短辺長0.35mの範囲に焼土が広がる。

焼土及びその周辺より須恵器杯蓋や土師器甕・甑等の破片が出土した。

出土遺物（Fig.16）**00015**は、天井部にヘラケズリを施し、頂部が平坦となる須恵器蓋である。器面調整は、頂部以外はヨコナデである。器色は、内外面共に灰白色である。胎土は密で、焼成も堅緻である。口径は11.6cmで、器高4cmを測る。**00016**も同形の須恵器蓋である。天井部外面には「×」印のヘラ記号を複数描く。器色は、外面が暗灰色で、内面は暗青灰色を呈する。胎土は密で、焼成も堅緻である。**00017**は、小型の土師器甕である。調整は、外面に細いタテハケメ、内面は胴部にエラケズリが残る。胎土は粗である。復原口径11.8cmを測る。**00018**は、胴部の下半が膨らむ土師器甕である。調整は、内面にヘラケズリを残し、他は不明である。器色は、にぶい褐色～赤橙色を呈する。胎土は粗である。復原口径13.6cmを測る。

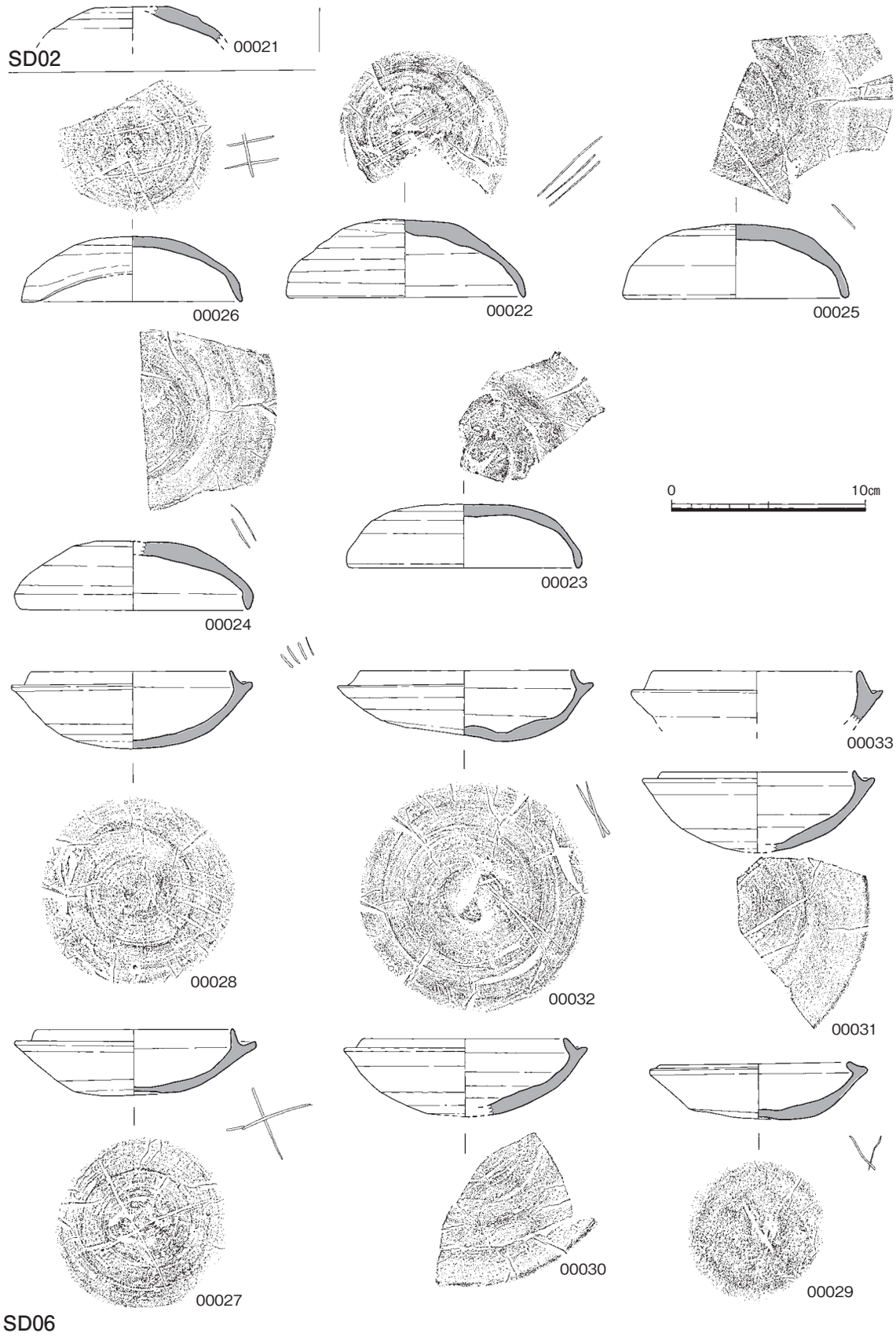


Fig.17　SD02・06溝出土遺物実測図（1/3）

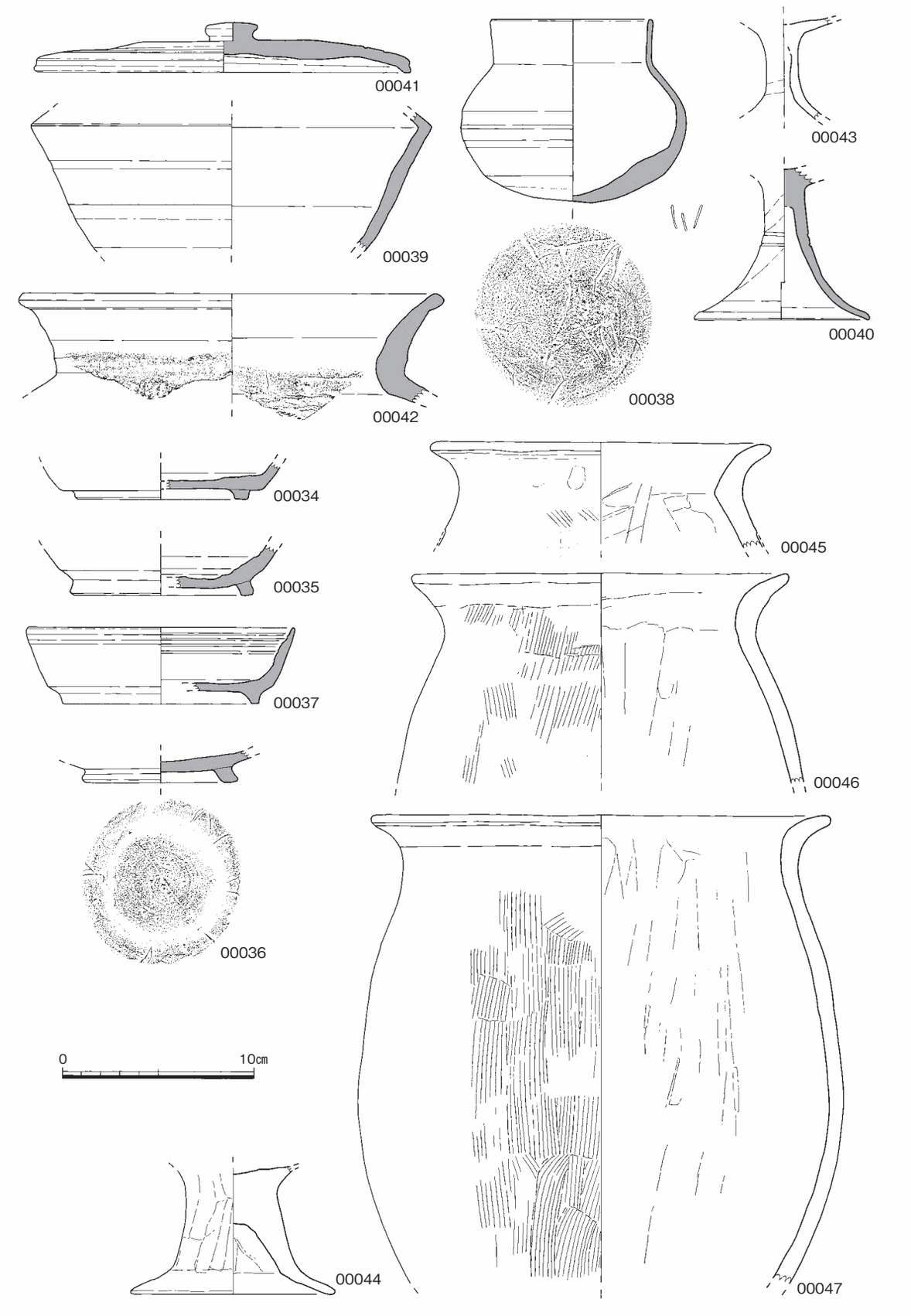


Fig.18　SD06溝出土遺物実測図（1/3）

5．溝状遺構（Fig.3・17～22、PL.4～7）

今回調査で最も特徴的な遺構は、大小の溝遺構である。大きく南北・東西方向に走るものに区別出来るが、切り合いがあり、先後関係のあるものや連絡して一体に機能していたと考えられるものが多く見られる。個別に出土形状と規模・共伴遺物について記す。

SD01溝（Fig.3）調査区の南西で検出された北西から南東方向へ走る溝で、延長8m以上・幅0.6m・深さ0.15mを測る。SD02・05・07溝と連絡する。

SD02溝（Fig.3・17）本溝は、調査区の南西隅で検出した不整土坑状の溝である。規模は、延長3m・幅0.7m・深さ0.2mを測る。埋土内から小型須恵器の杯蓋破片**00021**が出土した。調整は内外面ともにヨコナデである。器色は灰色で、焼成も堅緻である。

SD03溝（Fig.3）本溝は、調査区南西隅で検出した南北方向の小溝である。SD06溝に切られる。規模は、延長4.3m・幅0.3～0.5m・深さ0.1mを測る。

SD04溝（Fig.3）本溝は、調査区の南西隅で検出した不整な土坑状の溝である。規模は、長辺長が3.2m・幅0.7m・深さ0.1mを測る。

SD05溝（Fig.3）本溝は、調査区の南西側で検出した大型の土坑状溝である。規模は、延長が5m・幅1.3m・深さ0.1mを測る。西側でSD07溝に連絡する。

SD06溝（Fig.3・17・18、PL.4）本溝は、調査区の西辺に平行して直線的に伸びる南北方向の大溝である。その軸線は、N－25°－Wをさし、磁北よりやや西に振れる。SD03・10・11・12・15・20・21・23溝を切る。また、規模は、延長が36.5m以上・幅1.3m・深さ0.35mを測る。埋土は灰褐色砂質土と暗灰褐色粘質土との互層で、かなりの流れが想定出来る。埋土中からは、須恵器蓋杯や高台付杯、土師器甕・高坏などの破片が数多く出土した。

出土遺物（Fig.17・18）**00022**は、小型の須恵器杯蓋である。天井頂部にヘラケズリ・他はヨコナデである。外面に平行する３本のヘラ記号を付す。器色は灰白色である。口径12.6㎝・器高5.1㎝である。**00023**も小型の須恵器杯蓋破片である。調整はヨコナデである。器色は褐灰～灰褐色を呈する。口径12.4㎝・器高3.3㎝である。**00024**も口縁端部が「く」字形に折れる小型須恵器杯蓋である。天井部に平行する２本のヘラ記号を付す。また、その頂部にヘラケズリが僅かに残り、平坦をなす。器色は内外共ににぶい橙色を呈する。口径12.6㎝・器高3.5㎝である。**00025**も赤焼き須恵器の杯蓋破片である。調整は、天井部に僅かにヘラケズリを残し、他はヨコナデである。器色は、外面が灰赤色で、内面は淡橙色である。胎土は密である。口径12㎝・器高3.8㎝強を測る。**00026**も須恵器杯蓋破片である。焼けひずみのために口縁が波打っている。天井部に小範囲にヘラケズリが残り、他はナデである。天井部に２本線に直交する一本沈線をヘラ記号として描く。器色は、外面が暗灰色で、内面は灰色を呈する。胎土は密である。口径11.6㎝・器高3.4㎝を測る。

次に**00027**は、受け部立ちあがりの低い須恵器杯身である。調整は、外底部の一部にヘラケズリを残し、他はヨコナデである。底部外面の中央に「×」印のヘラ記号を付す。器色は、外面が青灰色で、内面は暗青色を呈する。受け部径は12.8㎝・器高3.5㎝を測る。**00028**は、受け部立ちあがりが低く内傾する小型須恵器杯身である。調整は、外底部の一部にヘラケズリを施し、他はヨコナデである。外底部に４本の平行沈線のヘラ記号を付す。器色は、外面が赤色で、内面は灰赤色を呈する。胎土は密である。受け部径17.7㎝・器高4.1㎝を測る。**00029**は、受け部立ち上がりが非常に小さく、完全に内傾する小型の須恵器杯身である。調整は、外底部にヘラケズリで、他はヨコナデを施す。ま

た、外底部に「×」印のヘラ記号を付す。器色は灰白色である。胎土は密で、焼成はやや軟質である。受け部径11.3cm・器高3cmを測る。**00030**も須恵器杯蓋破片である。受け部立ちあがりは非常に低い。外底部に「×」印のヘラ記号を付す。調整は、外底の一部にヘラケズリを加え、他はヨコナデである。器色は青灰色を呈する。胎土は密である。受け部径12.8cm・器高4.1cmを測る。**00031**も受け部

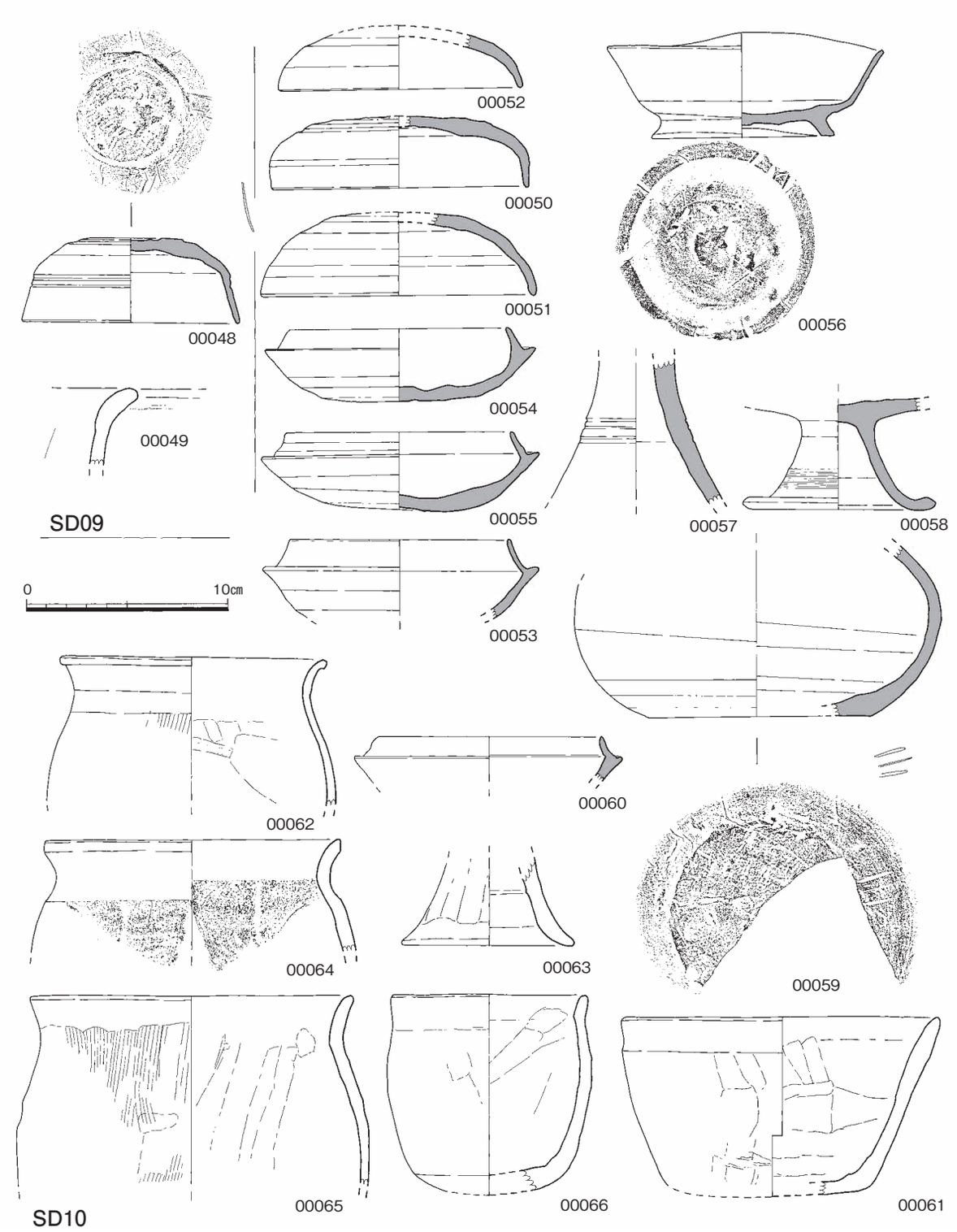


Fig.19　SD09・10溝出土遺物実測図（1/3）

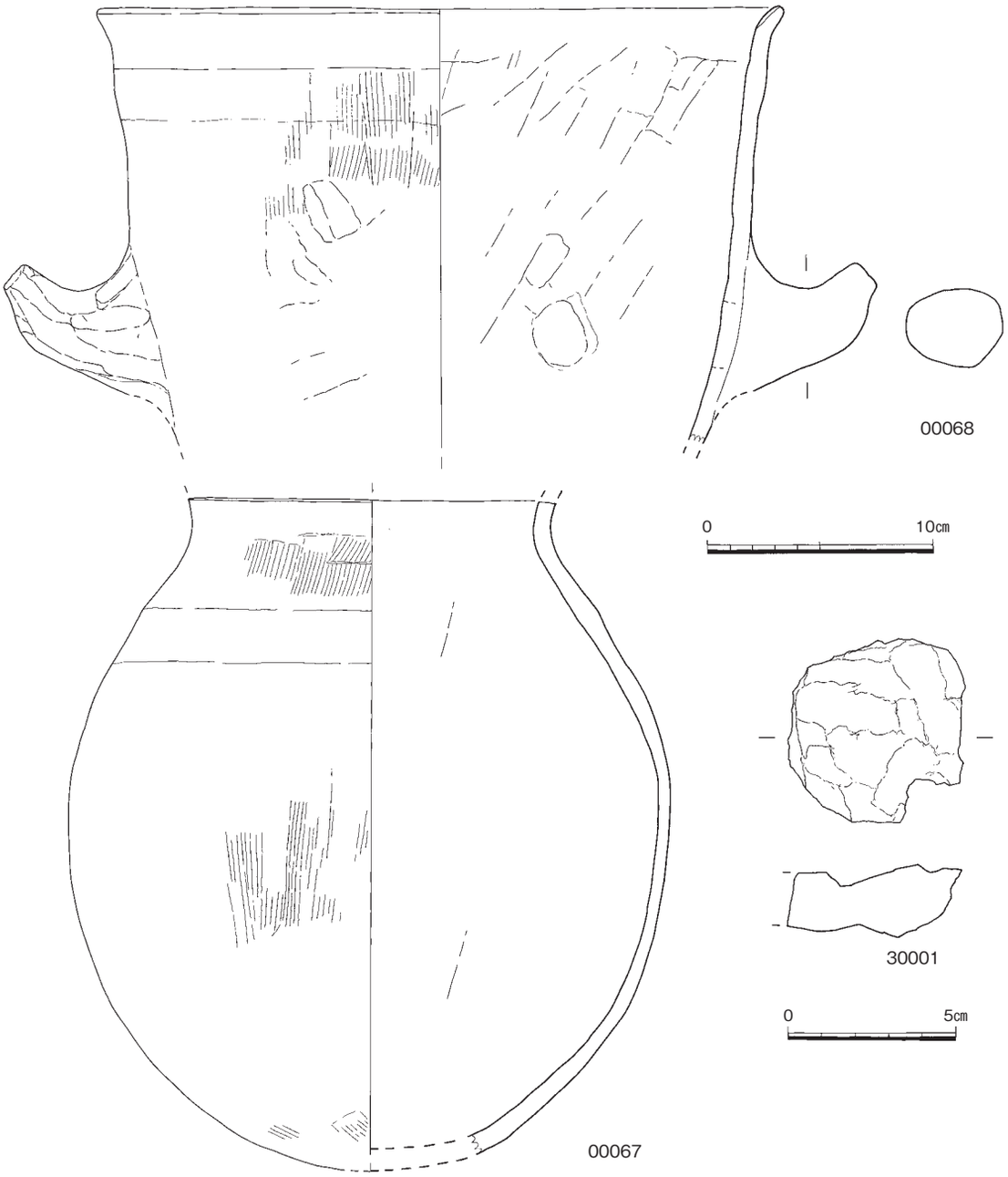


Fig.20　SD10溝出土遺物実測図（1/2・1/3）

立ちあがりの非常に低い須恵器杯蓋破片である。外底の一部にヘラケズリを施し、他はヨコナデである。ヘラ記号は平行する２本の沈線か。器色は青灰色である。受け部径12.2cm・器高4.3cmを測る。

00032も浅い器形で、受け部の立ち上がりが小型で内傾化が著しい須恵器杯身である。外底部の二分の一程度のヘラケズリを残す。また、不整な「×」印のヘラ記号を付す。器色は灰～灰白色である。受け部径13.5cm・器高3.7cmを測る。**00033**もいびつな受け部立ち上がりをもつ須恵器杯身破片である。調整はヨコナデである。器色は青灰色を呈する。復原口径13.2cmである。**00034**は、低い高台杯である。外底端よりやや入った位置に高台を付す。調整は内外共にヨコナデである。器色は青灰色を呈する。高台部径9.2cmを測る。**00035**は、外端部にやや踏ん張る高台を付す。外底部はヘラケズリ

である。器色は青灰色を呈する。胎土は密である。復原高台径9.8cmを測る。**00036**は、高台が外側に踏ん張る高台杯である。外面にヘラケズリを残し、他はヨコナデである。器色は青灰～明青灰色を呈する。高台部径8.3cmである。**00037**は、底部の外端に低い高台を付す杯である。外底部がヘラケズリで、他はヨコナデである。器色は明青灰色である。胎土は密である。口径14.4cm・器高4.1cmを測る。

00038は、須恵器直口壺である。肩部下に２条の浅い沈線を巡らし、外底部にヘラ記号を付す。外底部の一部にはヘラケズリを施し、他はヨコナデである。器色は、外面が紫灰色で、内面は青灰色である。口径8.7cm・器高9.8cmを測る。**00039**は、須恵器の長頸壺の胴部破片である。残存する屈曲部の下半はヘラケズリで、他はヨコナデである。器色は青灰色である。復原胴部径21.4cmを測る。**00040**は、小型高坏の脚部破片である。筒部の中位に２条沈線を廻らす。調整はヨコナデである。器色は、外面が明紫灰で、内面は青灰色を呈する。底部径9.5cmである。**00041**は、非常に低い須恵器杯蓋である。口縁端部は丸みを持ち、天井部に扁平な擬宝珠摘みを付する。調整は、天井部のほぼ全面にヘラケズリを加える他は、ヨコナデである。器色は、明青灰～青灰色を呈する。口径20.1cm・器高2.7cmである。**00042**は、須恵器の中型甕である。頸部は厚く、口縁端部は玉縁状となる。口縁部はヨコナデデで、外面荒いタタキ・内面にも荒い青海波文を残す。内外面共に灰かぶりである。器色は明青灰色を呈する。復原口径22.6cmを測る。

00043～00047は、土師器である。**00043**は、手捏ねの高坏である。筒部に浅い沈線１条を廻らす。器色は淡橙色を呈する。**00044**は、高坏脚部である。外面筒部はヘラナデを加える。器色は橙～赤色を呈する。胎土は粗である。復原底部径11cmを測る。**00045**は、断面が「く」字形に屈曲する甕破片である。調整は、口縁がヨコナデで、内面はヘラケズリである。器色は褐灰色である。胎土は粗である。復原口径18.2cmである。**00046**は、緩い立ち上がりの甕である。調整は、口縁がヨコナデで、外面荒いタテハケメ・内面ヘラケズリである。器色は黄灰～褐灰色を呈する。復原口径20.2cmである。

00047も口縁が緩く外開する甕である。調整は、外面が荒いタテハケメで、内面に細かいヘラケズリを加える。口縁部はヨコナデである。

SD07溝（Fig.3）本溝は、調査区西辺で検出した南北方向の小溝である。規模は、延長29m以上・幅0.5m・深さ0.45mを測る。SD01溝と連絡する。

SD08溝（Fig.3）本溝は、調査区のほぼ中央で検出した南北方向の溝である。溝内には小型の土坑状の窪みが連続して認められる。規模は、延長7.5m・幅1m・深さ0.25mを測る。SD10溝に切られる。

SD09溝（Fig.3・19）本溝は、調査区中央で検出した南北方向の小溝である。規模は、延長26m・幅0.3m・深さ0.1mである。SD13・15・16・17・24・30溝と連絡する。埋土中からは土師器・須恵器破片が少量出土した。

出土遺物（Fig.19）**00048**は、小型の須恵器杯蓋である。口縁部との境に浅い沈線を廻らす。調整は、天井頂部にヘラケズリを施し、他はヨコナデである。器色は灰～灰白色を呈する。復原口径は11cm・器高4.3cmを測る。**00049**は、土師器甑？口縁部破片である。内面にヘラケズリが残る。器色はにぶい赤褐色～褐灰色を呈する。

SD10溝（Fig.3・19・20）本溝は、調査区の南端付近で検出した東西溝である。規模は、延長が12m・幅0.8m・深さ0.4mを測る。SD06溝に切られる。埋土内からは纏まって土師器甕・須恵器蓋杯等が出土した。

出土遺物（Fig.19・20）**00050**は、小型の須恵杯蓋である。調整は、天井頂部にヘラケズリを施し、他はヨコナデである。器色は、青灰色を呈する。胎土は密で、焼成も堅緻である。復原口径13cm・器高3.6cmを測る。**00051**は、小型の須恵器杯蓋である。天井部の一部にヘラケズリを施し、他はヨコナ

デである。器色は青灰色を呈する。胎土は粗である。復原口径14cm・同器高4.3cmを測る。**00052**は、小型の須恵器杯蓋の小破片である。天井部は丸っこく、一部にヘラケズリを残す。器色は、青灰色を呈する。胎土は密である。復原口径12.4cm・同器高3.2cmを測る。**00053**は、薄造りの須恵器杯身である。調整はヨコナデである。器色は、外面が青灰～暗青灰色で、内面は青灰色を呈する。胎土は密である。受け部径14cmを測る。**00054**は、受け部立ち上がりの低い杯身である。外底部は全てヘラケズリで、他はヨコナデである。器色は青灰色を呈する。胎土は密である。受け部径13.8cm・器高3.7cmを測る。**00055**は、受け部の立ち上がりが内傾する須恵器杯身である。調整は、底部の殆どがヘラケズリで、他はヨコナデである。器色は灰白色を呈する。胎土は粗である。受け部径14cm・器高4cm強を測る。**00056**は、高台が底部端から外側に踏ん張る杯である。焼けひずみで器形の歪みが著しい。外

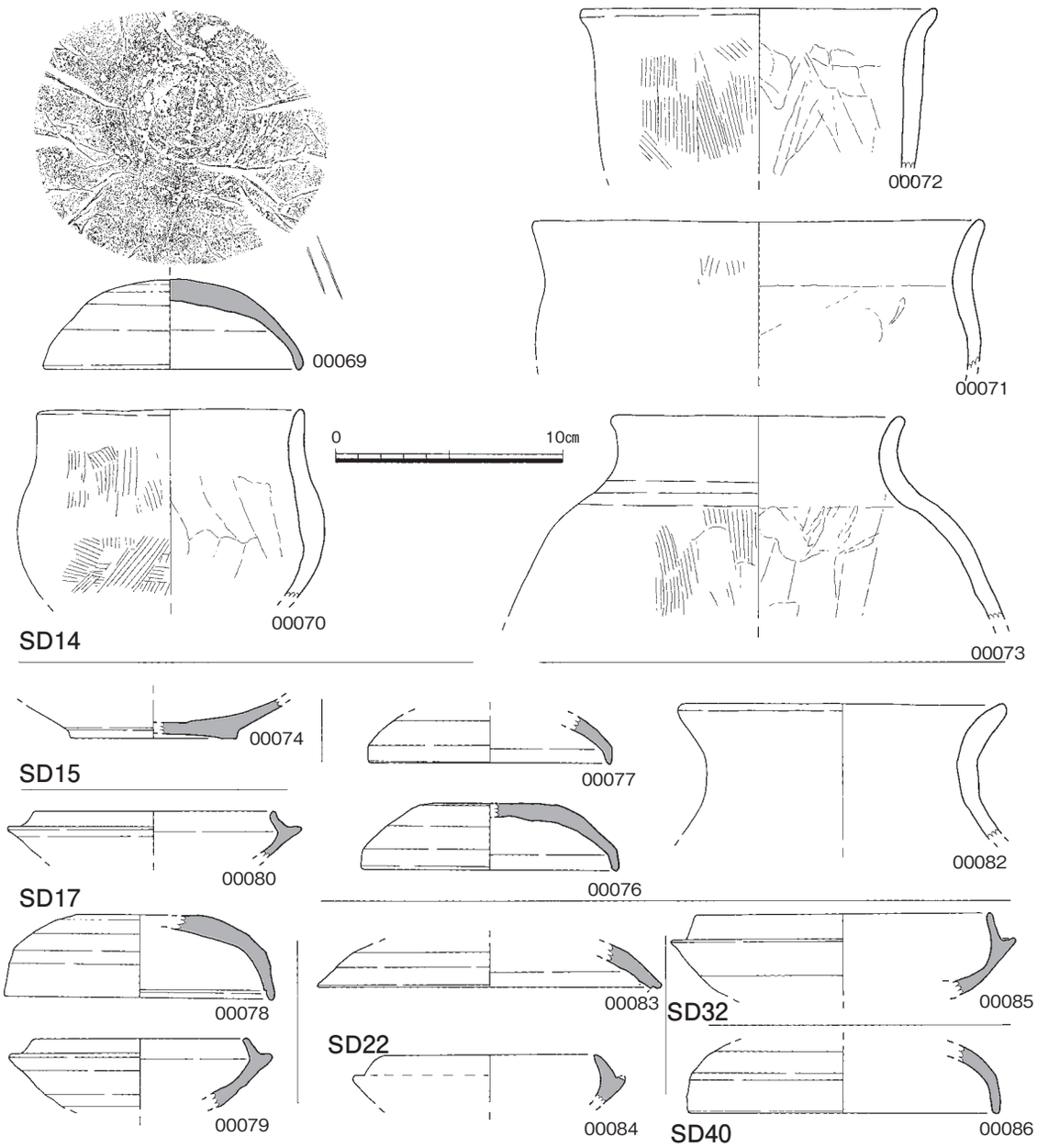


Fig.21　SD14・15・17・22・32・40溝出土遺物実測図（1/3）

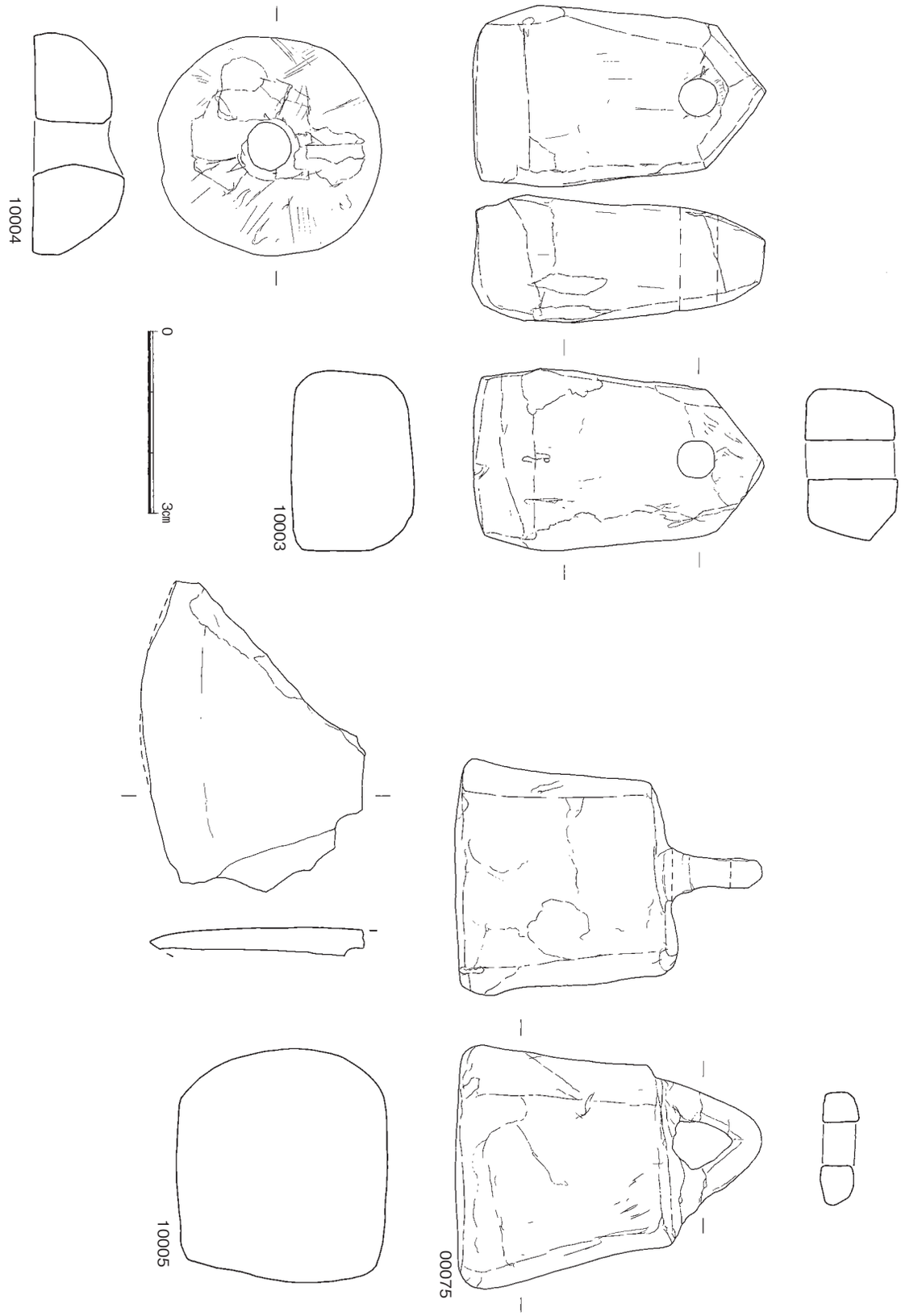


Fig.22　SD15溝出土遺物実測図（1/1）

底部の中央に「×」印のへら記号を付す。調整は、底部にヘラケズリを加える以外は全てヨコナデである。器色は青灰色を呈する。胎土は密である。口径16.1cm・器高5.4cm程度を測る。**00057**は、須恵器高坏脚部破片である。筒部の中央付近に３条の平行沈線を廻らす。調整は全てヨコナデである。器色は内外共に青灰色を呈する。胎土は密で、焼成も堅緻である。**00058**は、短脚の須恵器高坏脚破片である。裾部は畳付が大きい。調整は外面にカキメが残り、他はヨコナデである。**00059**は、平瓶？か。外底部よりやや上がった位置にヘラケズリを加え、他はヨコナデである。外底部近くに３本の平行沈線でなるヘラ記号を付す。器色は、外面が暗青灰色で、内面は青灰色である。底部径は1.8cmである。**00060**は、小型の赤焼き須恵器杯身である。調整は、器面の荒れのために不明である。器色は、外面が灰白色で、内面は灰褐色である。胎土は密である。受け部径13.4cmを測る。**00061**は、土師器鉢である。器面の荒れが激しいが、外面はヘラナデ、内面にはヘラケズリが残る。器色は、外面が赤褐～にぶい橙色で、内面は赤褐色を呈する。胎土は密で、焼成は堅緻である。口径16.2cm・器高9.1cmを測る。**00062**は、薄造りの小型甕である。調整は、口縁部内外にヨコナデ、外面に細いタテハケメ・内面にヘラケズリを加える。器色は外面が褐灰色で、内面は黄灰色を呈する。胎土は密で、焼成は堅緻である。復原口径13.5cmを測る。**00063**は、高坏脚部破片である。調整は、外面に丁寧なヘラナデ・内面に回転ヘラケズリを施す。器色は、外面が灰褐色で、内面はにぶい橙色を呈する。胎土は密で、焼成も堅緻である。脚径8.7cmを測る。**00064**も小型の甕破片である。外面に荒い平行タタキ、内面に平行なアテ具痕を残す。製塩土器か。器色は、外面がにぶい橙色で、内面は褐灰色を呈する。胎土は密である。復原口径15cmを測る。**00065**は、緩く外開する口縁をもつ甕である。調整は、外面が荒いタテハケメ、内面ヘラケズリである。器色はにぶい橙色～褐灰色を呈する。胎土は粗である。**00066**は、小型甕破片である。器色は外面が褐灰～明赤灰色で、内面はにぶい橙色を呈する。内面にヘラケズリが残る。胎土は密である。口径10cm・器高10.1cmを測る。**00067**は、頸部のしまりの悪い甕である。口縁端部を欠く。調整は、外面に僅かに荒いハケメが残り、内面はヘラケズリと思われる。器色は、外面がにぶい橙色で、内面は灰白色である。胎土は粗である。胴部最大径27cm・残存高30cmである。**00068**は、大型の甑である。調整は、外面に荒いハケメ、内面にナナメのヘラケズリを残す。器色は、内外共ににぶい橙色を呈する。胎土は粗で、焼成は堅緻である。復原口径31cmを測る。**30001**は、小型の鉄滓である。図左辺には工具による切断痕が見られる。長さ・幅・厚さが5.4×5.3×2.1cmで、重さ74gを測る。

SD11溝（Fig.3）本溝は、調査区の南側で検出したSD12溝に連絡する小溝である。規模は、延長1m・幅0.3m・深さ0.2mを測る。

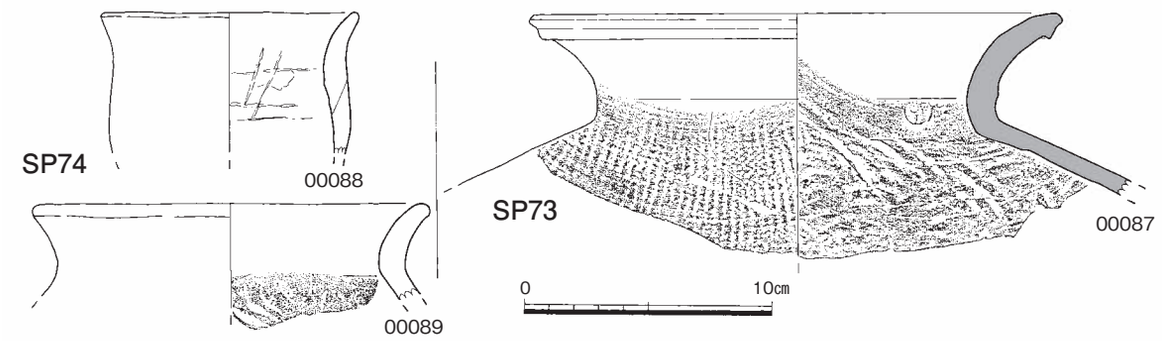


Fig.23　SP73・74柱穴出土遺物実測図（1/3）

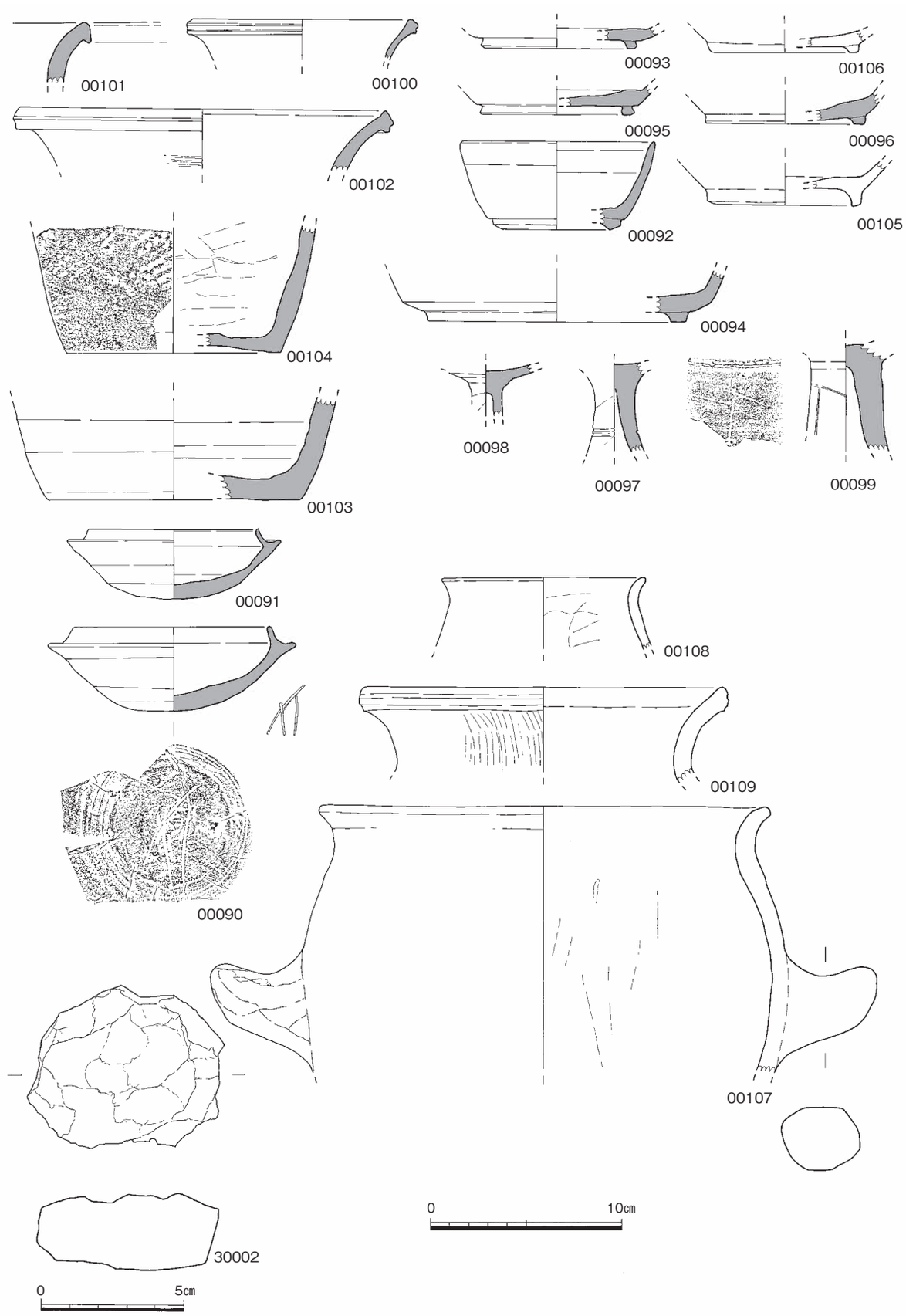


Fig.24　Ⅱ・Ⅲ層出土遺物実測図（1/2・1/3）

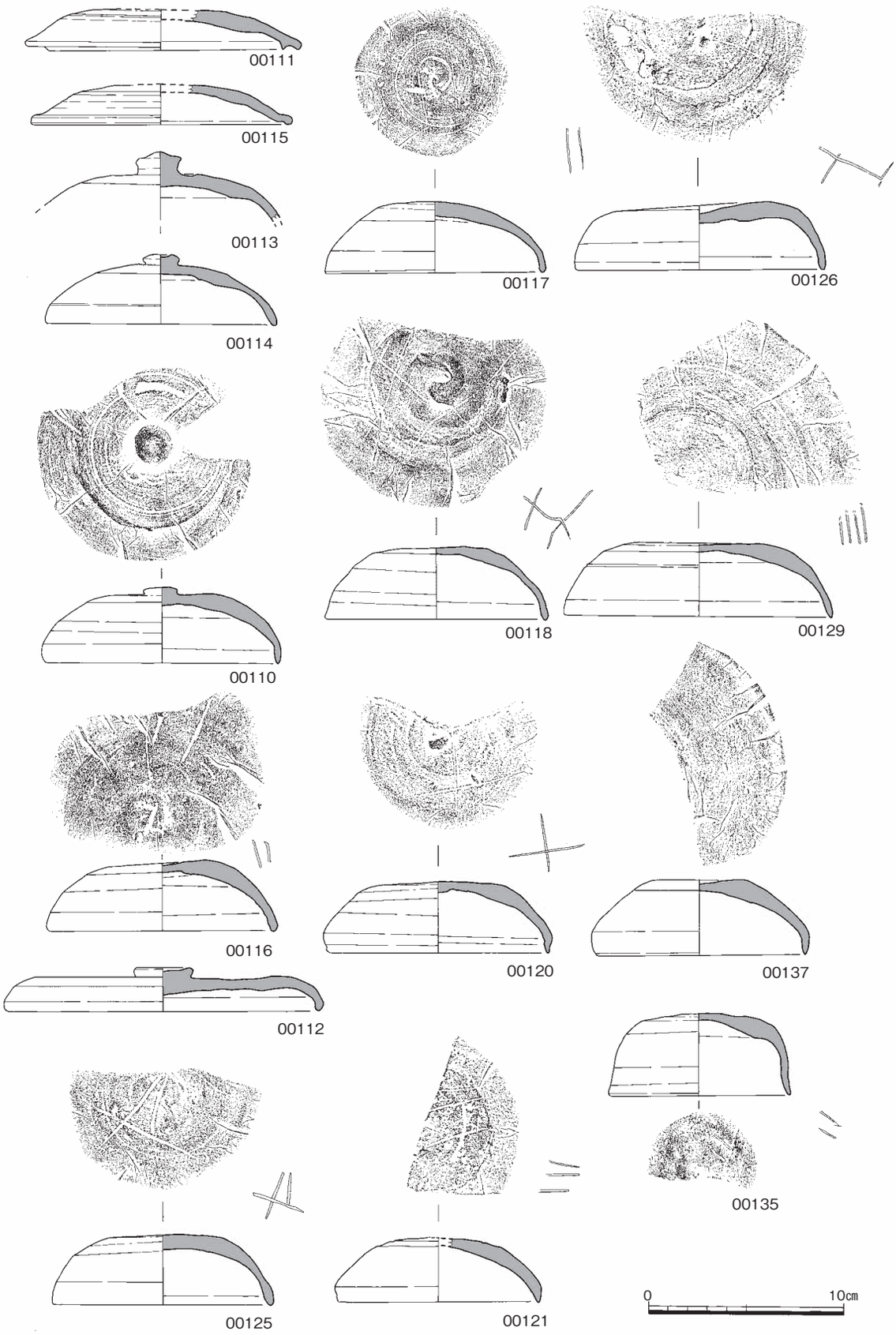


Fig.25　Ⅳ層出土遺物実測図（1/3）①

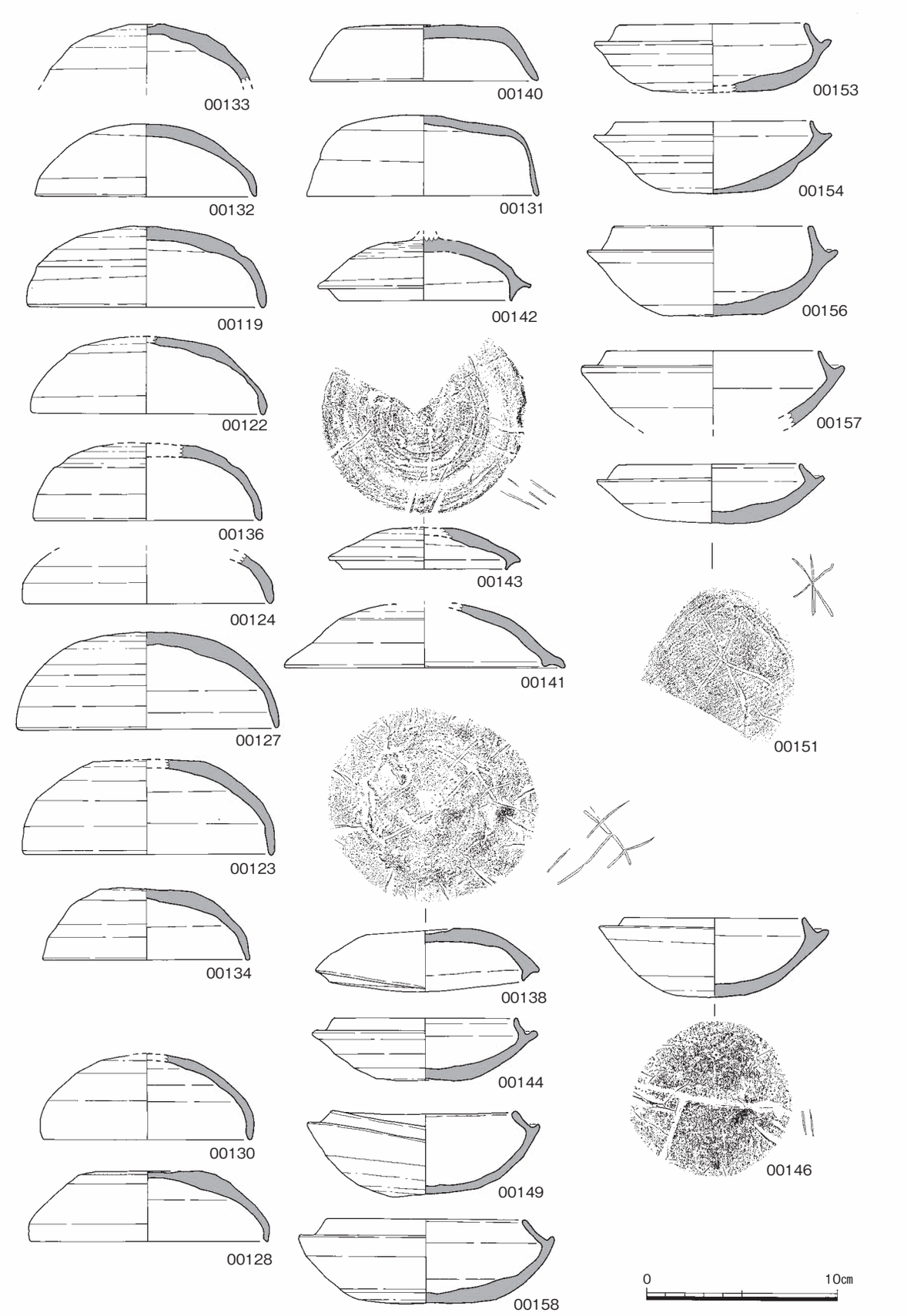


Fig.26　Ⅳ層出土遺物実測図（1/3）②

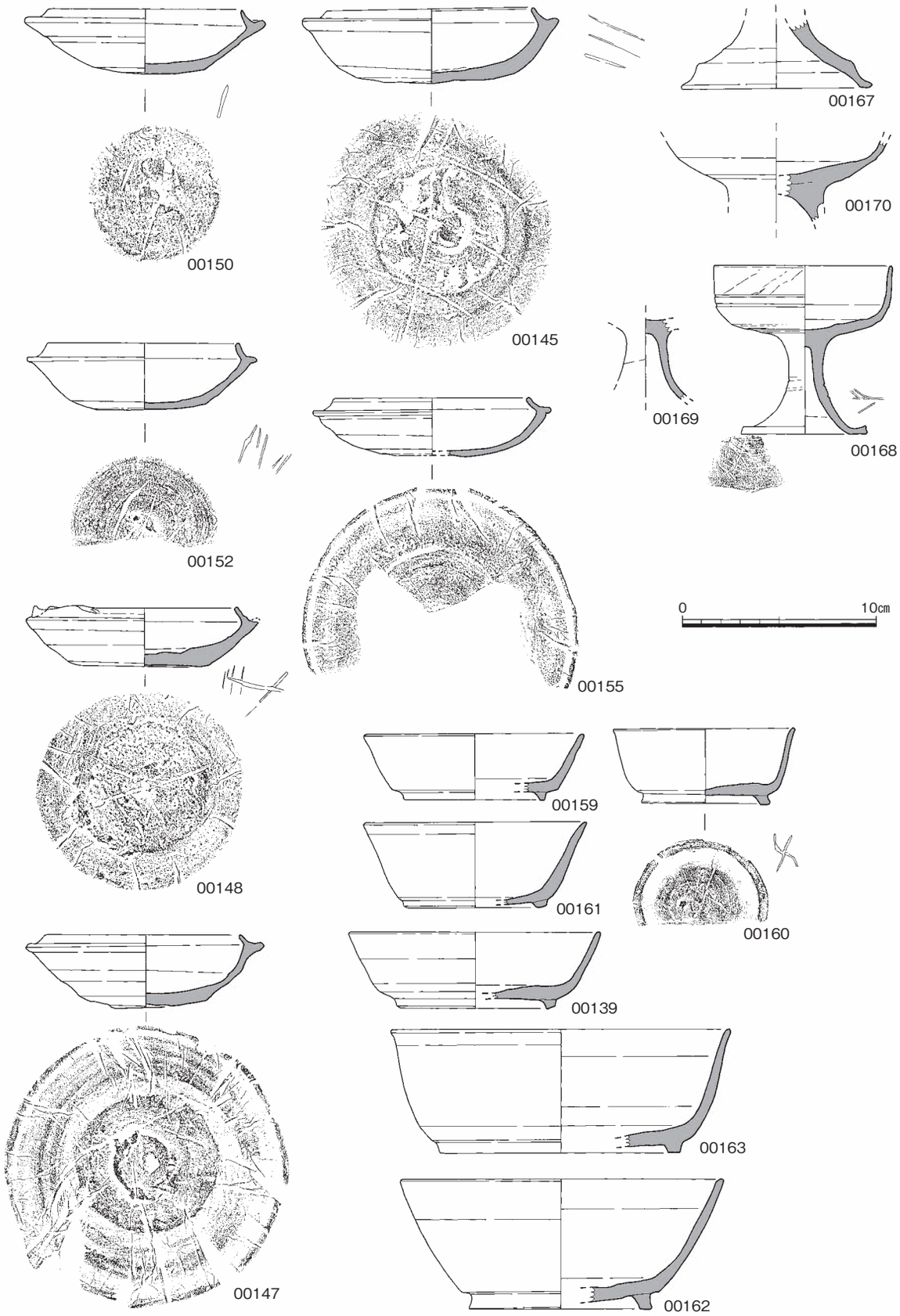


Fig.27　Ⅳ層出土遺物実測図（1/3）③

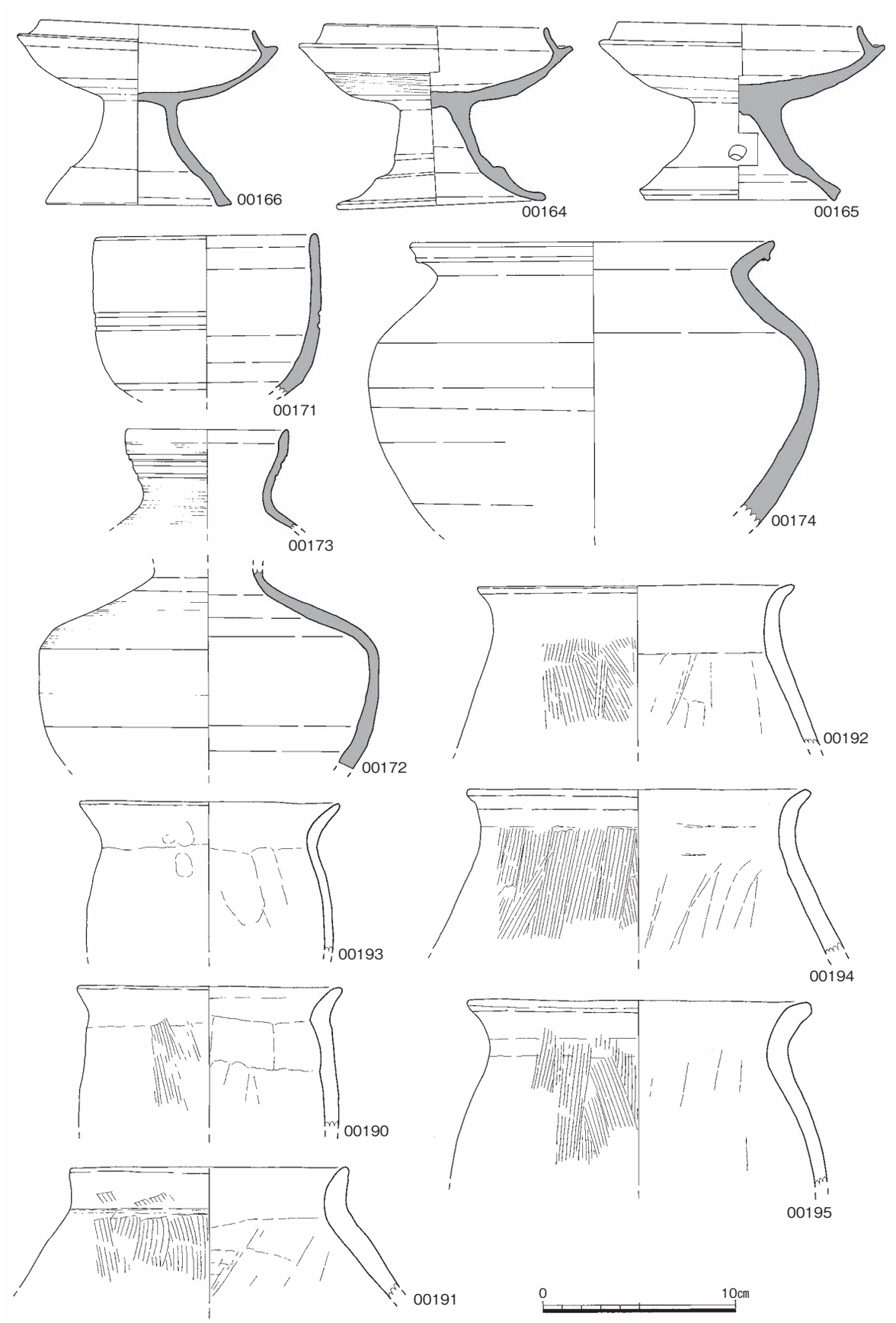


Fig.28　Ⅳ層出土遺物実測図（1/3）④

SD12溝（Fig.3）本溝も調査区南側で検出した小溝である。規模は、延長1.8m・幅0.5m・深さ0.2mを測る。SD11溝に連絡する。

SD13溝（Fig.3）本溝は、調査区の南東から北西方向に蛇行して伸びる小溝である。SD09・14・15・16・17・24・30溝と連絡する。規模は、延長が33.5m・幅0.4m・深さ0.2mを測る。

SD14溝（Fig.3・21、PL.4）本溝は、調査区の北東近くで検出した東西方向の小溝である。規模は、延長4.5m・幅0.7m・深さ0.2mを測る。SD09・13溝と連絡している。埋土からは須恵器蓋杯や土師器甕等が少量出土した。

出土遺物（Fig.21）**00069**は、須恵器杯蓋である。天井部に僅かなヘラケズリを施す。また、天井部には平行する沈線のヘラ記号を付す。器色は灰白色である。胎土は粗である。口径11.7㎝・器高4㎝を測る。**00070**は、小型の土師器甕である。外面は二次焼成のためににぶい赤橙色である。調整は、外面が荒いハケメで、内面はヘラケズリを施す。胎土は密である。復原口径12㎝である。**00071**は、緩く立ち上がる甕である。外面にハケメ・内面にケズリが窺える。胎土は粗である。復原口径20.4㎝を測る。**00072**は、小型の土師甕である。調整は、外面が荒いタテハケメで、内面はヘラケズリである。器色は、外面がにぶい橙色で、内面は黒褐色を呈する。胎土は密である。復原口径16㎝を測る。**00073**は、口縁のしまる甕である。調整は、口縁がヨコナデで、外面に荒いハケメ・内面は荒いヘラケズリが残る。器色は灰白～にぶい橙色である。復原口径13.2㎝である。

SD15溝（Fig.3・21・22）本溝は、調査区北側で検出された東西方向の纏まった溝である。規模は、延長23m以上・幅1m・深さ0.15mである。SD13・17・30溝と連絡する。また、SD06溝に切られる。埋土内より緑釉陶器、陶製・石製権、石製紡錘車などが出土した。

出土遺物（Fig.21・22）**00074**は、緑釉陶器碗破片である。荒れが激しいが、釉薬は明オリーブ灰色である。地はにぶい黄橙色である。底部はやや上げ底状となる。胎土は非常に密で、焼成も堅緻である。底部径7.5㎝を測る。**00075**は、須恵質の権の完形品である。やや裾広がりの方柱の上端に山形の釣り手を付す。法量は、タテ・ヨコ。厚さが5×4×3.9㎝で、重さは68.76gである。器色は青灰色である。**10003**は、頭部を山形に整形する滑石製の完形の権である。頭部に径0.6㎝の一孔を穿つ。ケズリ調整が見える。法量は、タテ・ヨコ・厚さが4.8×3×2.1㎝で、重さ49.43gである。**10004**は、滑石製紡錘車である。サイズは、タテ・ヨコ・厚さが3.7×3.6×1.5㎝で、重さ27.43gを測る。孔径は0.6㎝である。**10005**は、石包丁破片である。頁岩製。砂層最下層出土。

SD16溝（Fig.3）本溝は、調査区北側で検出した東西の小溝である。規模は、延長8m・幅0.5m・深さ0.1mである。SD15・17・30と連絡する。

SD17溝（Fig.3・21、PL.5～7）本溝は、調査区北隅で検出した大溝である。南側で東に曲がり、SD30に繋がる。中央部には細かい杭が打たれた井堰が付設される。SD15・16溝への揚水施設か。規模は、延長が11m以上・幅3m以上・深さ0.5mである。

出土遺物（Fig.21）**00076**は、小型の須恵器杯蓋である。頂上部はヘラケズリで、他はヨコナデ調整である。器色は青灰色である。口径11.6㎝・器高3㎝である。**00077**は、同様の小型の須恵器蓋である。復原口径11㎝を測る。**00078**も須恵器杯蓋である。口縁と天井部との境には低い段をなす。また、口縁端部内面には沈線が廻る。天井部はヘラケズリで、他はヨコナデである。器色は、青灰色である。口径12.2㎝である。**00079**は、受け部立ち上がりの低い須恵器杯身である。器色は明青色である。受け部復原径11.8㎝を測る。**00080**は、やはり小型の杯身破片である。器色は暗青灰である。受け部径13㎝を測る。**00082**は、土師器甕破片である。器面の荒れのために調整不明である。胎土は粗である。復原口径14.6㎝を測る。

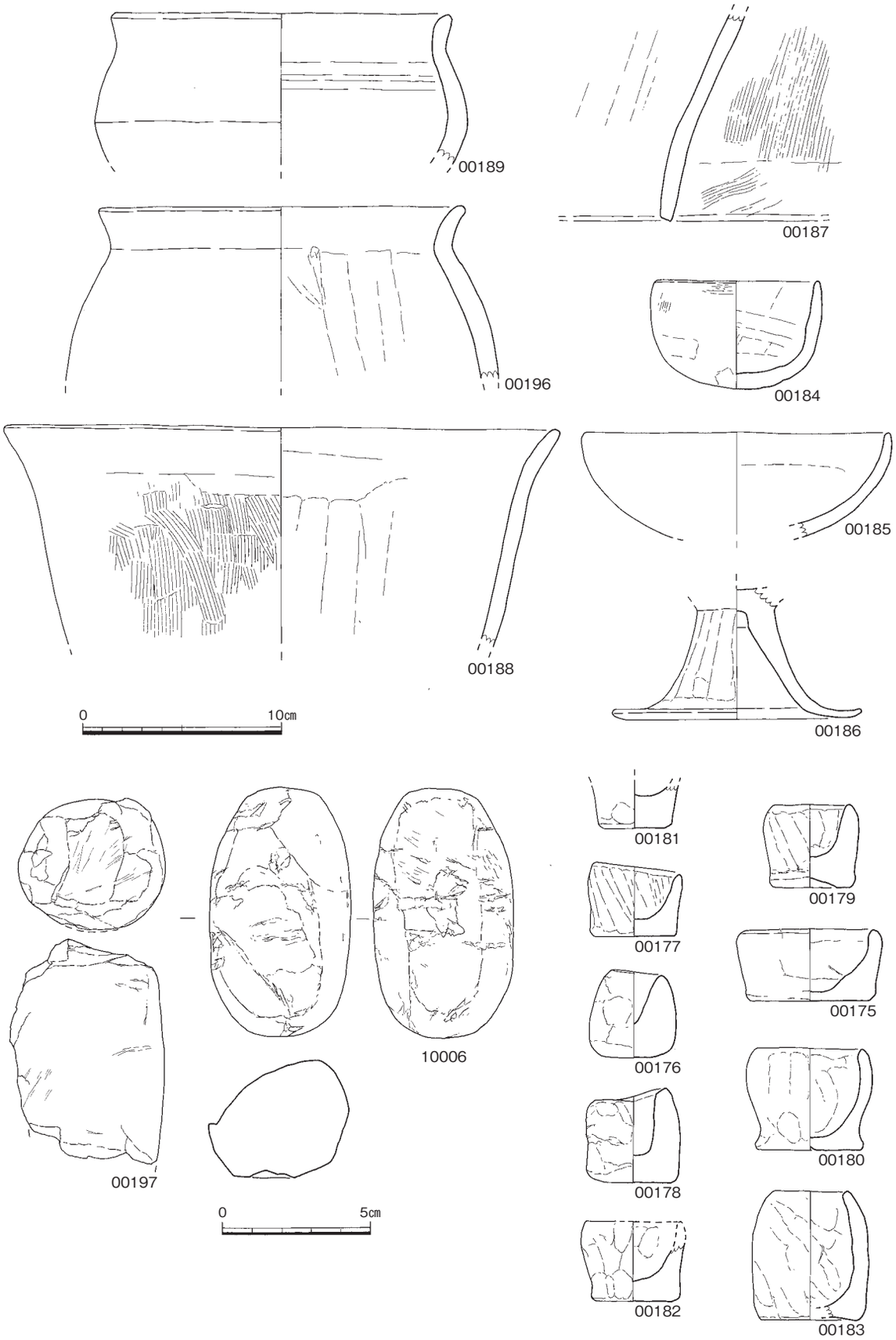


Fig.29　Ⅳ層出土遺物実測図（1/2・1/3）⑤

SD18溝（Fig.3）本溝は、調査区の北西から南西方向に弧状に伸びる小溝である。規模は、延長1.5m以上・幅0.4m・深さ0.25mである。SD07・20・23・15溝を切る。

SD19溝（Fig.3）本溝は、調査区の西北隅で検出した南北方向の小溝である。規模は、延長11m以上・幅0.5m。・深さ0.15mである。SD15溝を切る。

SD20溝（Fig.3）本溝は、調査区の西北側で検出した東西方向の小溝である。規模は、延長10.6m以上・幅0.4m・深さ0.1mである。SD06・07・19溝に切られる。

SD21溝（Fig.3）本溝は、SD20溝と平行する小溝である。規模は、延長11m・幅0.4m・深さ0.15m

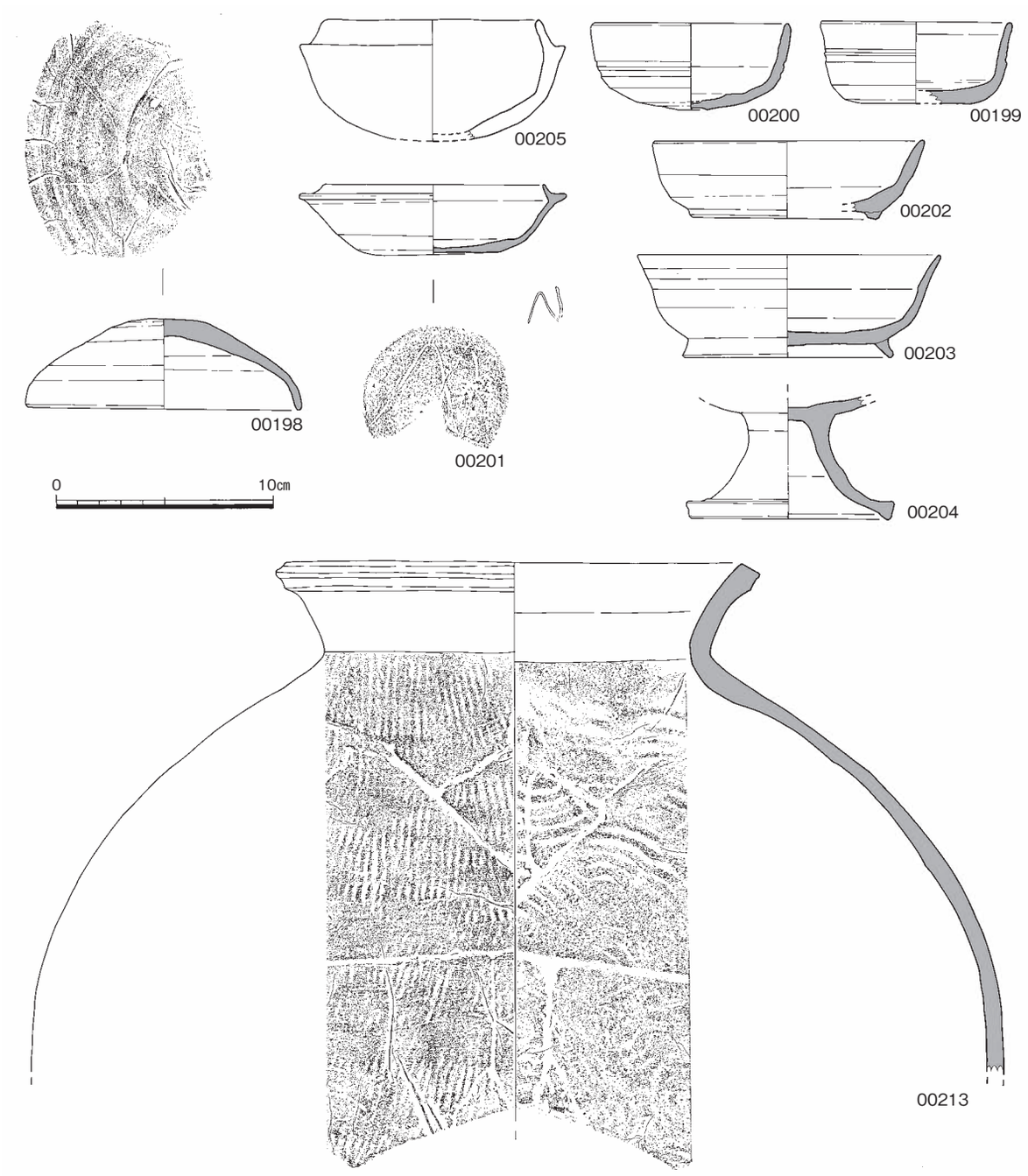


Fig.30　包含層出土遺物実測図（1/3）①

である。SD22・24と連絡する。

SD22溝（Fig.3・21）本溝は、調査区中央の北端近くで検出した小溝である。規模は、延長3.5m以上・幅0.4m・深さ0.1mである。SD21・24溝と連絡する。

出土遺物（Fig.21）**00083**は、口縁端部のカエリが欠ける須恵器杯蓋の破片である。天井部の一部にヘラケズリを加え、他はヨコナデである。器色は、灰色である。胎土は密で、焼成は堅緻である。復原受け部径15.4㎝である。**00084**は、受け部立ち上がりの内傾化が著しい須恵器杯蓋の小破片である。調整はヨコナデである。器色は内外共に青灰色である。胎土は密で、焼成は堅緻である。復原受け部径12.2㎝を測る。

SD23溝（Fig.3）本溝は、調査区の西北側で検出した東西方向の小溝である。規模は、延長10.5m以上・幅0.3m・深さ0.1mである。SD06・18・22溝に切られる。

SD24溝（Fig.3）本溝は、調査区北西側の中央で検出した南北方向の小溝である。規模は、延長8m・幅0.3m・深さ0.15mである。SD15・21溝に連絡する。

SD25溝（Fig.3）本溝は、調査区の西壁で検出した南北溝である。西側の立ち上がりが不明である。規模は、延長11.3m以上・幅0.7m以上・深さ0.15mである。

SD26溝（Fig.3）本溝は、調査区の南西隅で検出した不整形の土坑状の溝である。規模は、長辺長2m・短辺長0.5m・深さ0.1mである。

SD27溝（Fig.3）本溝は、調査区の中央で検出した南北方向の小溝である。規模は、延長3m以上・幅0.25m・深さ0.1mである。

SD28溝（Fig.3）本溝は、調査区の南壁付近で検出した土坑状の不整な溝である。規模は、長辺長2.8m・短辺長1m・深さ0.1mを測る。

SD29溝（Fig.3）本溝は、調査区の北壁近くで検出した土坑状の不整な溝である。規模は、長辺長2m・短辺長0.8m・深さ0.25mである。

SD30溝（Fig.3）本溝は、調査区の北東隅で検出された。SD17溝と一連の溝である。規模は、延長0.6m以上・幅1.5m・深さ0.3mである。

SD31溝（Fig.3）本溝は、調査区の北壁近くで検出した不整な土坑状の東西溝である。規模は、長辺長1.2m・短辺長0.6m・深さ0.25mである。

SD32溝（Fig.3・21）本溝は、調査区の北壁中央部付近で検出した東西方向の小溝である。規模は、延長1.5m・幅0.4m・深さ0.1mを測る。SD31・33・34溝と並列する。

出土遺物（Fig.21）**00085**は、やや薄造りの須恵器杯身である。底部の殆どを失う。器面調整は、外底部にヘラケズリを残し、他はヨコナデである。器色は内外面共に青灰色を呈する。胎土は密で、焼成は堅緻である。復原受け部径15.6㎝である。

SD33溝（Fig.3）本溝は、調査区の北壁際で検出した東西方向の小溝である。規模は、延長1.5m・幅0.5m・深さ0.1mである。SD31・32・34溝と並行する。

SD34溝（Fig.3）本溝は、調査区の北端壁際の中央で検出した小溝である。SD31・32・33溝と並行する。規模は、延長1.5m・幅0.5m・深さ0.1mを測る。

SD35溝（Fig.3）本溝は、調査区の北西隅で検出した小溝である。規模は、延長0.8m・幅0.3m・深さ0.15mである。SD19溝と連絡する。

SD36溝（Fig.3）本溝は、調査区の南西側で検出した土坑状の溝遺構である。規模は、延長1.5m・幅0.8m・深さ0.2mである。

SD37溝（Fig.3）本溝は、調査区の南壁近くで検出した弧状の小溝である。規模は、延長5.2m以

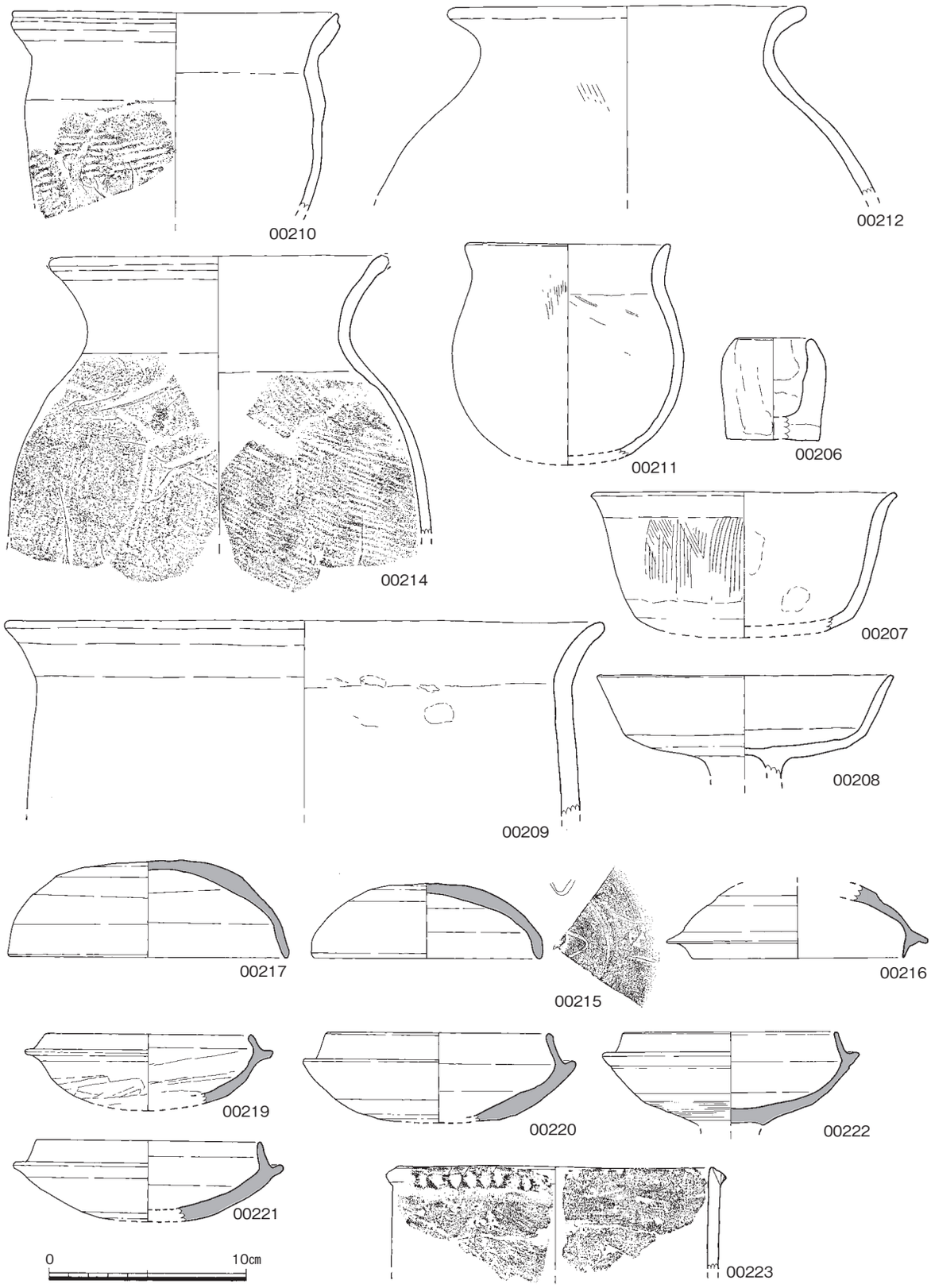


Fig.31　包含層・一括・下層溝出土遺物実測図（1/3）②

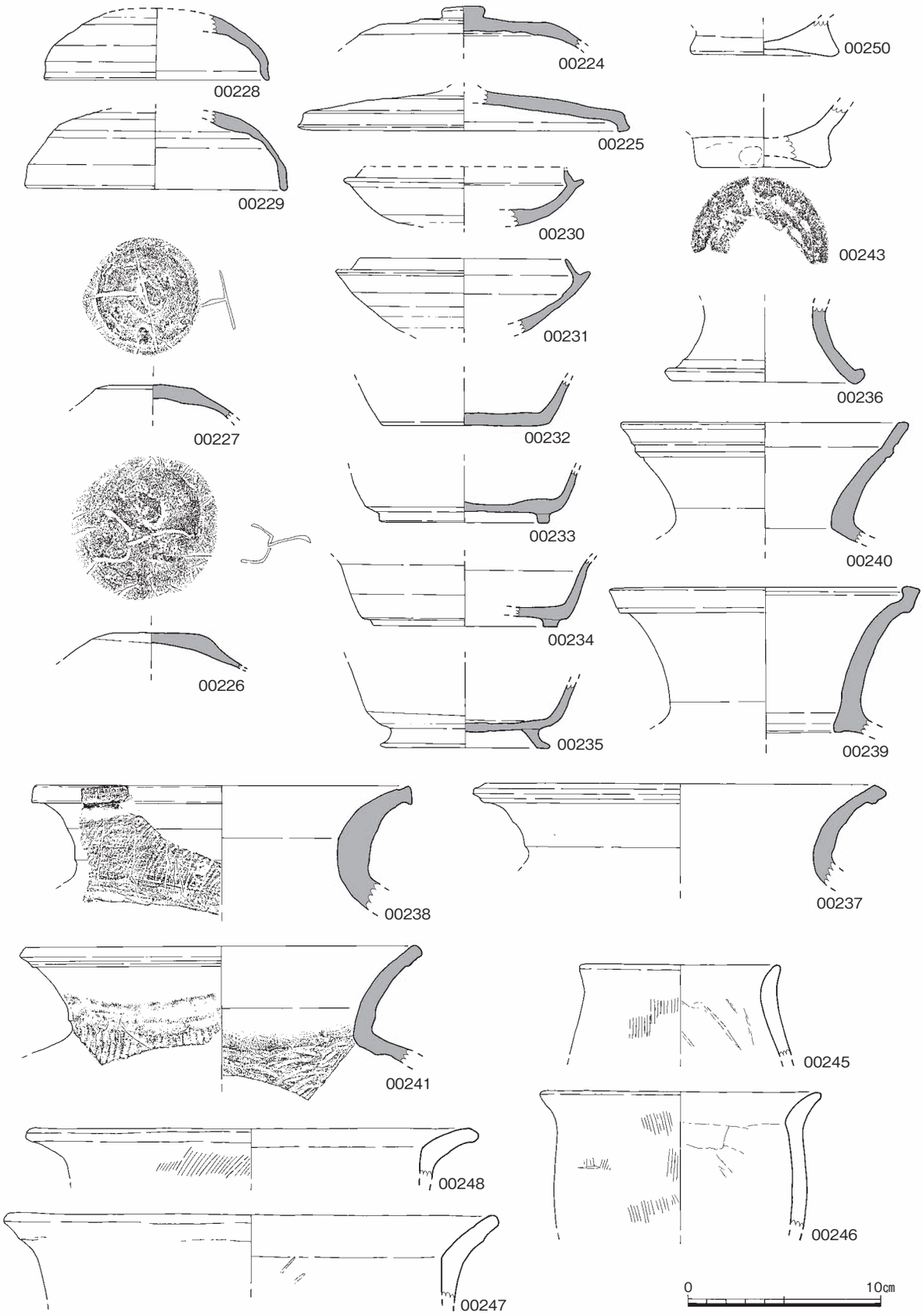


Fig.32　遺構検出面出土遺物実測図（1/3）①

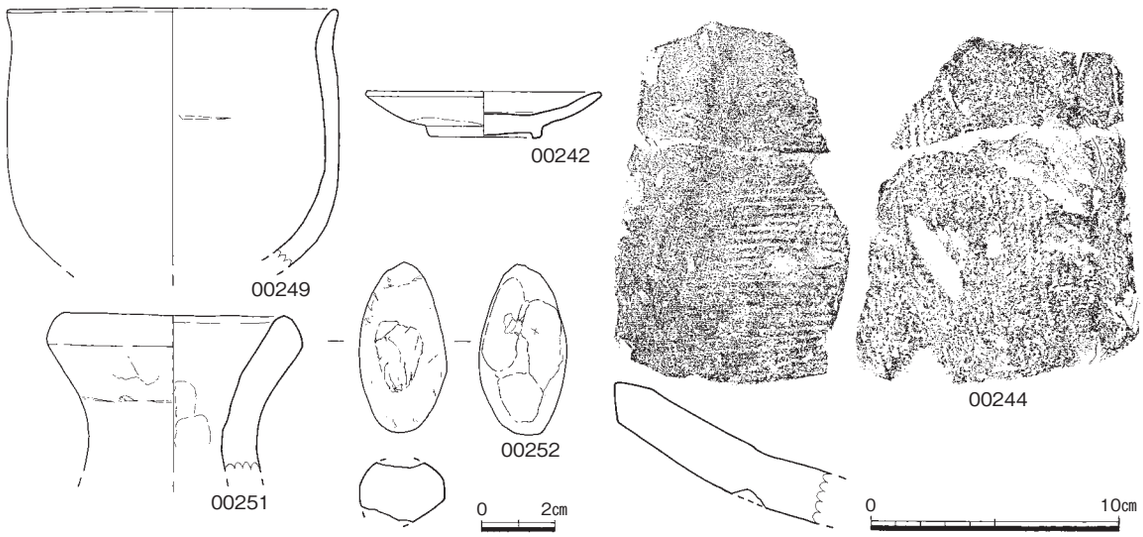


Fig.33　遺構検出面出土遺物実測図（1/2・1/3）②

上・幅0.5m・深さ0.1mを測る。

SD38溝（Fig.3）本溝は、SD37と連絡する小溝である。規模は、延長3.8m・幅0.6m・深さ0.1mを測る。

SD39溝（Fig.3）本溝は、SD37と考えられる弧状の小溝である。規模は、延長3m・幅0.6m・深さ0.2mである。

SD40溝（Fig.3・21）本溝は、調査区の南東側隅で検出した小溝である。SC01住居跡に切られる。規模は、延長6.5m以上・幅0.5m・深さ0.15mを測る。

出土遺物（Fig.21）**00086**は、須恵器杯蓋の小破片である。器色は内外面共に青灰色を呈する。胎土は密で、焼成は堅緻である。復原口径は14cmを測る。

6．柱穴（Fig.3・23）

調査区では東半部を中心に柱穴74ヶ所が検出された。

このうち、調査区の南東隅にあたる**SP73**で須恵器大甕**00087**が出土した。須恵器大甕の**00087**は、頸部が短く、口縁部は緩く外開する。調整は、外面が擬格子タタキで、内面は荒い青海波文が残る。口縁内外面はヨコナデである。器色は、青灰～暗青灰色を呈する。胎土は密で、焼成も堅緻である。口径22cmである。

また、**SP74**では、土師器甕**00088・00089**が出土した。**00088**は、小型の土師甕である。内面にヘラケズリが残るが、他は調整不明である。器色は明褐灰～灰白色である。胎土は粗である。復原口径10.6cmを測る。**00089**は、土師器甕である。調整は荒れのために不明である。器色は明褐灰～灰白色を呈する。胎土は密で、焼成は堅緻である。口径16.4cmである。

7．遺物包含層（Fig.4・24～31・PL.8）

調査では、住居跡・掘立柱建物・炉跡等が検出された調査区の東側を中心に整地層と考えられる遺物包含層が形成されていた。土層図（Fig.4）に見るように、包含層は**Ⅱ・Ⅲ層**（2. 黄褐色床土・3. 淡黄灰色土層）の一枚と**Ⅳ層**（6. 暗灰褐色粘質土層）の２枚である。

① **Ⅱ・Ⅲ層出土遺物**（Fig.24）**00090**は、受け部立ち上がりの低い須恵器杯身である。底部の二分の一にヘラケズリで、他はヨコナデ調整である。また、底部にヘラ記号を付す。器色は灰白～青白色である。胎土は密で、焼成も堅緻密である。受け部径は13.1cmである。**00091**は、小型の須恵器杯身である。立ち上がりは低く、内傾が著しい。調整はヨコナデである。器色は暗青灰色を呈する。胎土は密で、焼成も堅緻である。復原受け部径11.4cm・同器高3.8cmを測る。**00092**は、高台の低い須恵器杯である。底部端に高台を付す。調整はヨコナデである。器色は明青灰～青灰色である。復原口径は10.4cmを測る。**00093**は、やや外側に踏ん張る高台をもつ須恵器杯である。調整はヨコナデである。器色は内外面共に青灰色を呈する。高台部径は8.3cmを測る。**00094**は、大型の高台杯破片である。外底部にヘラケズリを加え、他はヨコナデである。器色は灰白色である。胎土に黒色微粒子を含む。復原高台部径は13.8cmである。**00095**は、小型の高台杯で、外底部にヘラケズリ、他はヨコナデ調整加える。器色は灰白色を呈する。高台部径8.6cmを測る。**00096**も低い高台杯である。外底部はヘラケズリ、他はヨコナデである。器色は灰～青灰色である。高台部径8.6cmを測る。

00097～00099は、須恵器の小型高坏脚部破片である。**00097**の筒部には２条の平行沈線を廻らす。器色は青灰～明青灰色を呈する。**00098**は胎土が粗であるが、焼成は堅緻である。

00100は、小型の須恵器壺？か。調整は、両面共にヨコナデである。器色は灰白～灰色を呈する。口径は12.4cmである。

00101・00102は、須恵器甕である。調整はいずれもヨコナデである。器色は暗青灰～明青灰色を呈する。**00102**は、口径が20.2cmを測る。

00103・00104は、須恵器壺底部破片である。長頸壺であろう。調整は、底部端と外底部には回転ヘラケズリ、内面はヨコナデである。器色は明青灰～灰白色を呈する。底部径は、それぞれ13.4cm・11.4cmを測る。いずれも胎土は密で、焼成は堅緻である。

00105・00106は、土師器高台杯である。**00105**は、外面器色がにぶい橙色、内面は灰白色である。高台部径は8.2cmである。**00106**は、低い高台で、器色が明褐灰から淡赤橙色を呈する。高台部径は8cmである。**00107**は、土師器の中型の把手付甕である。器面の荒れが激しい。器色は外面がにぶい橙色で、内面は灰白色である。口径は24cmである。**00108**は土師器の小型甕である。口径10.8cmである。**00109**は、赤焼きの軟質須恵器甕か。外面にハケを施す。器色は、外面が明褐色、内面はにぶい黄橙色である。胎土は粗である。口径は19.6cmである。

30002は、小型の鉄滓である。図右の端部を人為的に切断している。サイズは、長さ・幅・厚さが5.3×7×2.6cmで、重さ132gを測る。

② **Ⅳ層出土遺物**（Fig.25～29）**00110～00174**は、須恵器の杯蓋・杯身・高台杯・甕・壺・提瓶である。

00110は、天井部に低い、扁平な擬宝珠を付ける赤焼き硬質の須恵器蓋である。天井の一部にヘ

ラケズリを施す。器色は赤褐からにぶい橙色である。口径は12cmである。**00111**は、受け部のカエリの低い蓋である。器色は青灰色である。受け部径は13.4cmである。**00112**は、扁平なボタン状摘みを付す蓋である。天井部はヘラケズリである。口径16.4cmである。**00113**は、口縁を失う蓋破片である。天井上端部はヘラケズリである。器色は青灰色を呈する。**00114**は、低い小型の摘みを付す蓋である。天井頂部付近がヘラケズリで、他はヨコナデである。器色は暗青灰色を呈する。口径は12cm・器高3.5cmである。**00115**は、丸みをもった口縁端部の蓋である。器色は灰白～灰色を呈する。口径は13.6cmである。**00116**は、天井部が平坦な蓋である。頂部にヘラケズリを加え、他はヨコナデである。２本の平行沈線をヘラ描きする。器色は内外面共に青灰色である。口径は12cmで、器高3.7cmである。**00117**は、天井部の頂部にヘラケズリを加えた小型の蓋である。口縁はやや立ち上がる。内外面共にヨコナデ調整を施す。器色は青灰色である。口径は11.5cmで、器高3.7cmである。**00118**は、ヘラケズリで頂部が平坦をなす小型蓋である。天井部にへら記号を付す。器色は灰色である。口径は11.6cm・器高3.5cmを測る。**00119**は、口縁部と天井部との境に浅い段を有する蓋である。天井部はヘラケズリで、他はヨコナデである。口径は12.8cmである。**00120**は、口縁が「く」字に曲がる蓋である。天井部はヘラケズリである。×印のヘラ記号を付す。口径は11.6cmを測る。**00121**は、口縁端部を面取りする蓋である。天井にヘラ記号を付す。口径は10.4cmである。**00122**は、天井頂部にヘラケズリを加える蓋である。口径12.5cmである。**00123**も口縁部の立つ蓋である。口径は13.4cmである。**00124**も蓋の小破片である。口径は13.4cmを測る。**00125**は、丸い天井部の蓋で、ヘラ記号を付す。器色は青灰色である。口径は11.4cmである。**00126**は、いびつな蓋である。天井部にヘラケズリを加え、たはヨコナデである。天井にヘラ記号を付す。**00127**は、丸い天井部をもつ蓋である。天井部の殆どにヘラケズリを加える。器色は青灰色である。口径は14cm・器高5.2cmを測る。**00128**は、天井部の平坦な蓋である。器色は青灰色である。口径は12.8cm・器高3.8cmである。**00129**は、天井の頂部にヘラケズリを加え、他はヨコナデ調整を加える蓋である。器色は暗青灰色を呈する。天井外側に４本の平行沈線のへら記号を施す。**00130**は、半球形の小型蓋である。天井の一部に小さいヘラケズリを施し、他はヨコナデを施した蓋である。器色は灰白色である。口径は11cm・器高4.5cmを測る。**00131**は、直口壺の蓋か。薄造りの製品である。天井部にはヘラケズリ・ナデを加え、他はヨコナデである。器色は灰白色である。胎土は密で、焼成はやや軟質である。口径は12.3cm・器高4.2cmである。**00132**は、天井の丸い蓋である。器色は灰白色を呈する。口径は11.9cmである。**00133**は、口縁部を欠く蓋破片である。器色は、青灰～明褐灰色である。**00134**は、天井頂部にヘラケズリを加えた小型の蓋である。内面にヘラ記号を付す。器色は暗青灰～青灰色である。口径は11cm・器高3.7cmである。**00135**は、直口壺の蓋か。口縁は緩く外側に開く。天井部にはヘラケズリを施し、他はヨコナデ調整である。内面にヘラ記号が残る。**00136**は、丸い天井部をもつ蓋である。天井部との境に低い段を有する。器色は青灰～明青灰色である。ロクロ回転は右回りである。焼成は堅緻である。口径は12.2cmで、器高4cmを測る。**00137**は、天井部が小さく、ヘラケズリで平坦となる蓋である。他の調整はヨコナデである。側面に浅いヘラ記号を付す。また、器色は青灰色をなす。胎土は粗である。口径は11cm・器高3.9cmを測る。**00138**は、焼けひずみの大きい製品で、受け部のカエリも低くて鈍い。天井頂部中央は窪みとなる。また、天井部のヘラケズリ後に大きくヘラ記号を描いている。器色は灰白～青灰色を呈する。受け部径は11.9～10cmを測る。

00139は、低い高台をもつ浅い杯である。調整は、外底部・底部外端にヘラケズリを加え、他はヨコナデである。器色は青灰～明青灰色を呈する。胎土は密で、焼成は粗である。口径は13.2cm・器高は4cmを測る。

00140は、平底杯を返した蓋である。摩滅が著しい。器色は明青灰色である。口径は12.2cm・器高3cmである。00141は、受け部のかえしが非常に低い蓋である。天井部にヘラケズリで、他はヨコナデである。器色は明青灰色である。口径は15cmである。00142は、天井部の小さいボタン状の摘みを欠く小型蓋破片である。摘みに近い天井部はヘラケズリが顕著である。器色は明青灰色である。口径は11.4cmである。00143も受け部のかえりが小さい小型蓋の破片である。天井は僅かにヘラケズリで、他はヨコナデである。器色は青灰色を呈する。口径は10.2cm・器高2.2cm程度を測る。

00144〜00157は、須恵器杯身である。

00144は、立ち上がりの低い受け部をもつ杯身である。底部の下半部にヘラケズリで、他はヨコナデである。器色は暗青灰〜灰色である。受け部径は12cm・器高3.2cmを測る。00145は、体部に比較して受け部の立ち上がりが弱い杯身である。器色は明青灰色を呈する。底部全面にはヘラ記号を付す。受け部径は13.5cm・器高4cmを測る。00146は、受け部のいびつな杯身である。底部の下半にヘラケズリを施す。底部に平行沈線のヘラ記号を付す。器色は灰白色である。胎土は粗で、焼成は堅緻である。受け部径は12.2cmである。00147・00148・00149・00150・00151・00152・00153・00154・00155はいずれも受け部の立ち上がりが小さく、内傾が著しい小型の杯蓋である。底部の下半部にはヘラケズリを施し、他はヨコナデである。00156〜00158はやや大型の身であるが、立ち上がりはいずれも内傾が著しく、器面調整も小型杯身と同様である。

00159〜00163は、直線的に立ち上がる胴部に低い高台を付す杯である。

小型の00159〜00161とやや大型の00162・00163とが知られる。小型では口径が9.6cm〜11.6cm、大型では口径17〜18cmを測る。器色は、いずれも明青灰色を呈する。

00164〜00167は、須恵器有蓋高坏である。浅い杯部に脚部が屈曲する小型の製品である。脚円筒部に焼成前穿孔をもつものもある。杯部の下半にはヘラケズリを加え、他はヨコナデである。器色は、青灰〜灰白を呈する。受け部径13.8〜15cm・器高9.4〜9.7cmを測る。

00168・00169は、小型の無蓋高坏である。口縁と胴部との境に２条沈線を廻らす。また、脚筒部にも２条沈線を付す。底部にはカキ目を施し、他はヨコナデである。00168は、口径9.5cm・器高9.9cmを測る。00170も須恵器高坏破片である、筒部は径が大きい。器色は青灰色を呈する。

00171は、須恵器鉢である。胴部中位に２条沈線を巡らす。底部付近はヘラケズリ調整である。器色は暗青灰色を呈する。口径11.8cmを測る。

00172は、須恵器壺である。口縁と底部を欠く。胴部は肩が張り、頸部は良くしまる。肩部から頸部にカキ目を加え、胴部下半にヘラケズリが残る。器色は青灰色である。胴部最大径18cmを測る。

00173は、須恵器提瓶或いは横瓶である。頸部以下にカキ目を施す。器色は暗青灰色である。復原口径8.4cmを測る。

00174は、口縁部が短く外開する須恵器甕である。胴肩部以下には粗雑な回転ヘラケズリを施す。器色は灰白〜灰色を呈する。復原口径は19.6cmを測る。

00175〜00183は、土師器の手捏ね土器である。いずれも鉢形で、中には十分な整形を行わず、所謂天の手くじり様の浅い00176・00178なども見られる。内外面共に指頭痕が顕著である。

00184は、小型の土師器マリである。外面上部にハケメ、他はヘラケズリを加える。器色は灰白色である。口径8.1cm・器高6.5cmを測る。00185もやや浅い土師器マリである。内外面共に丹塗りを施す。荒れのために調整は不明である。復原口径15.6cmを測る。

00186は、土師器高坏の脚部破片である。脚端部はやや上方に伸び上がる。脚筒部はヘラによる面取りが残る。器色は橙色である。復原脚裾部径12.8cmを測る。

00187は、土師器大型甑の底部破片である。外面にタテハケメ、内面ヘラケズリが残る。00188も大型の甑破片である。緩く外開する口縁部をもつ。器色は褐灰色である。復原口径28.6cmを測る。

00189は、肩部の張る土師器甕である。器面の荒れのために調整は不明である。器色は淡橙色を呈する。復原口径17.6cmを測る。00190も小型の土師器甕である。外面にタテハケメ、内面に荒いヘラケズリを施す。器色は橙色である。復原口径14cmを測る。00191も小さい口縁部の土師器甕である。胴はやや張るか。器壁は肉厚である。器色は橙色を呈する。復原口径14.8cmを測る。00192も中型の土師器甕である。外面に荒いタテハケメ、内面は胴部にヘラケズリを加える。復原口径は16.8cmを測る。00193も小型の土師器甕破片である。薄造りである。調整は、内面にヘラケズリを残し、他は荒れのために不明である。器色は赤褐～黄橙色を呈する。復原口径は13.8cmを測る。00194も中型の土師器甕である。胴部は下半がやや膨らむか。調整は、外面に荒いタテハケメ、内面にヘラケズリを加え、口縁はヨコナデである。器色はにぶい橙から黄橙色を呈する。復原口径18.2cmを測る。00195も中型の土師器甕破片である。調整は、外面に細かいタテハケメ、内面にヘラケズリを加え、口縁部はヨコナデである。復原口径は18.2cmである。00196も断面が「く」字に折れる中型の土師器甕である。調整は、内面にヘラケズリを残す以外は荒れのために不明である。器色は赤褐色である。口径19.8cmを測る。00197は、円柱状土製品である。頭部はやや摩滅が見られる。カマドの支脚か。器色は褐灰色である。胎土はやや粗である。残存長11.5cm強・重さ522gを測る。

10006は、全周に磨り面をもつ軽石である。磨石と考えられる一部に打痕も残る。タテ8.4cm強・横4.8cm、重さ34.28gを測る。

③ 包含層・一括・下層溝出土遺物

調査の際に包含層として取り上げを行ったもので所属不明の遺物や一括、下層溝などと記録された遺物の一切を以下に記す。

まず包含層出土遺物である。00198は、狭い天井部を有する須恵器杯蓋である。口径13cmを測る。00199は、小型の平底杯破片である。底部にヘラケズリを施す。口径9cmを測る。00200も小型の須恵器平底杯である。胴部に２条沈線を巡らす。口径9.4cmを測る。00201は、小型の須恵器杯身である。薄造りで、受け部の内傾が著しい。底部に「N」字のへら記号を付す。受け部径13.6cmを測る。00202は、低い高台の杯である。胴部からそのまま高台へつながる。口径12.8cmを測る。00203は、内湾気味に伸びる胴部をもつ高台杯である。口径14.3cmを測る。00204は、小型の須恵器高坏脚部破片である。脚裾部径10cmを測る。

00205は、やや深い土師器（軟質須恵器）杯身である。全体にシャープさに欠ける。受け部径12.4cmを測る。00206は、土師器の小型手捏ね鉢である。器高5.3cmを測る。00207は、土師器鉢である。薄造りで、にぶい平底となろう。外面に荒いハケメが残る。復原口径16cmを測る。00208は、杯部の浅い土師器高坏破片である。底部にヘラケズリを残す。口径15.4cmである。00209は、大型の土師器甕である。器色は灰白食である。復原口径31cmを測る。00210は、特徴ある口縁部処理と胴部の荒い平行タタキをもつ小型甕である。内面には煮沸時の付着物が残る。所謂玄界灘式の製塩土器である。復原口径17cmを測る。00211は、土師器の小型甕である。外面にハケメ、内面にヘラケズリが残る。口径10.6cmを測る。00212は、頸部のしまる大型の土師器甕である。内面にヘラケズリを残す。復原口径18.6cmを測る。00213は、擬須恵土師器である。外面は平行タタキ後にヨコナデ、内面に大型の青海波文を残す。器色はにぶい橙色を呈する。口径21.5cmを測る。00214も擬須恵土師器甕である。膨らみの少ない器形である。外面に平行タタキで、内面には平行線のあて具痕が残る。復原

口径18cmを測る。

次に一括出土遺物である。00215は口縁部が小さく折れる須恵器杯蓋である。口径9.8cmを測る。00216は、口縁端部にかえりをもつ須恵器の小型杯蓋である。受け部径13.6cmを測る。00219は、小型の須恵器杯身である。底部はヘラケズリが顕著である。受け部径12.9cmである。00220は、受け部立ち上がりが細く、高い須恵器杯身である。受け部径14.2cmである。

次に下層溝出土遺物である。00217は、口縁と天井部の境に稜をもつ須恵器杯蓋である。口径14.6cmである。00221は、受け部の立ち上がりが小さい須恵器杯身である。受け部径14cmを測る。また、00222は、須恵器の小型有蓋高坏である。杯底部付近にカキ目を施し、他はナデである。受け部径13.4cmを測る。

00223は、全体図中に示したが地山に張りついて出土した小型の夜臼式土器甕破片である。口縁上端部に大きな刻み目突帯を巡らす。復原口径は16.2cmを測る。

8．遺構検出面等出土遺物（Fig.32・33）

00224・00225は、天井頂部にボタン状摘みを付す須恵器蓋である。00226・00227は、天井頂部が平坦に整形された須恵器杯蓋である。00228・00229も須恵杯蓋である。00230・00231は受け部立ち上がりの低い須恵器杯身である。00232は、平底杯である。00234～00235は高台杯である。00236は、須恵器脚付壺か。00237～00241は須恵器甕類である。00242は、小型の白磁皿である。高台部径4.8cmを測る。00243は、外底部にケズリを施す甕底部である。底部径7cmである。00244は、外面に縄目タタキ。内面に布目・板目残す平瓦破片である。00245～00249は、土師器甕類である。00250は、やや上げ底の夜臼式壺底部である。径7.8cmである。00251は、弥生式土器器台破片である。00252は、投弾破片である。全長4.6cm・幅2.4cmを測る

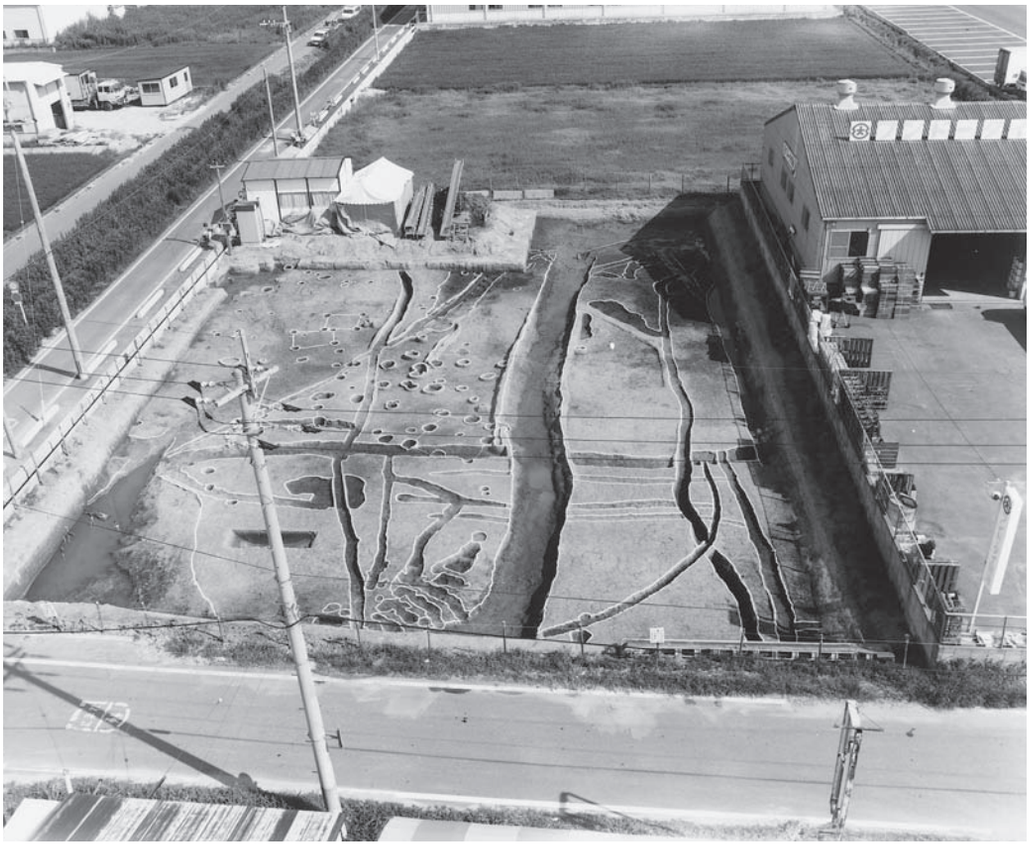
第四章　おわりに

これまで第２次調査で検出した各遺構及び出土した諸遺物について説明を加えてきた。
仲島遺跡はこれまでの調査から、福岡市の東側に広がる大野城市市域部分が遺跡群の中心と考えられ、墨書土器や人面墨書土器などの律令期の祭祀遺物を多く出土しており、太宰府と関連する有力な集落と推定される。ここでは紙面の残り少ないので今回調査の成果について記し、簡単なまとめとしたい。まず遺構の大半を占める溝では、相互に連絡するものが認められる。それは、SD09・13・15・16・17・24・30溝、SD01・02・05・07溝、SD25・22溝とSD32～34溝のように並列して切り合わない溝群であり、これらはそれぞれが一連の溝として機能していたと考えられよう。
また、遺構間の切り合いから、SD06溝が、SK02土坑及びSD03・10・11・12・15・20・23・25溝を切る。更にSC01住居跡がSD10溝を切っており、SK04土坑もSD26を切るなどの状況が観察される。
また、出土遺物の検討からSC01住居跡はSD10溝を切ることから８世紀後半以降、最も新しいと考えられるSD06溝も８世紀後半頃かと推定される。建物もSB03建物の掘方出土須恵器破片が６世紀末或いは７世紀初めであり、この前後に相次いだ建物群といえようか。
次に本調査で出土した遺物のうち、特徴的なものに「権」状製品がある。SD15溝から緑釉陶器・石製紡錘車とともに出土した石製・陶製の２種である。石製は、頭部が三角で、径0.6cmの一孔を片面から穿ち、長さ・幅・厚さが4.8×3×2.1cm、重さ49.3gを測る滑石製品である。また、陶製は、頭部がややすぼまる方柱状の製品で、頭の平坦部に釣り鐘の竜頭の様な逆V字形の摘みを付す。サイズは、長さ・幅・厚さが5×4×3.9cmで、重さ68.76gを測る。権もしくは権状製品はこれまで太宰府・博多などで金属製・石製・陶製・瓦質製などが60数例見つかっている。この中には、大野城市の仲島遺跡５次調査で包含層から重さ21.3gと24.4gの石製の例２個や、本遺跡の西側に広がる井相田Ｃ遺跡１次調査でも、条里線にのるとされる大溝SD01（Ｎ－83°－Ｗ、７世紀末～８世紀前半に掘削し、９世紀前半に埋没）から出土した例で人面墨書土器や焼塩土器・木器・瓦等とともに出土している。これは滑石製で、今回の出土例と類似し、やや小振りではあるが長さ・幅・厚さが4.3×2.5×1.3cmで、重さ19.59gを測る。今回出土した権状製品が本来の計量上の道具として機能したかについては今後の研究課題であろうが、出土する地点を見る限り、本遺跡は少なくとも古代においては太宰府と関連する有力な集落の一つと考える事が出来よう。

図　　版

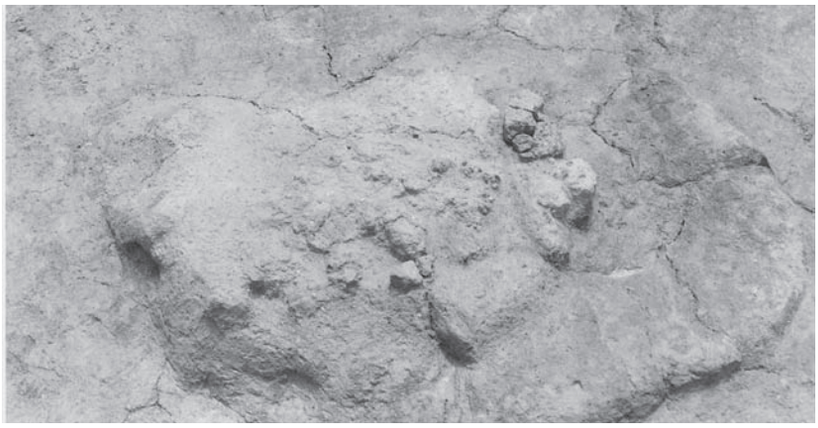
PLATES

調査地点調査状況（北西から）（上方は二日市狭隘部）



1．調査地区全景（北西から）

2．SC01住居跡出土状況（東から）

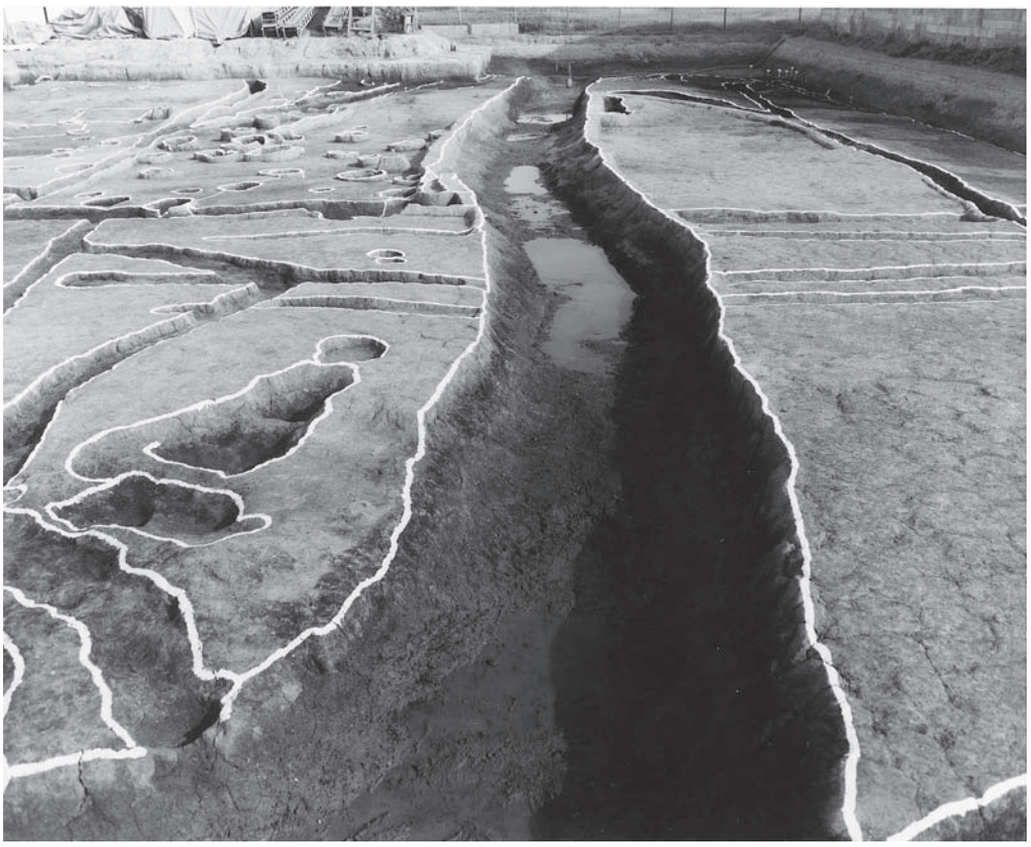


1．炉１出土状況（北から）

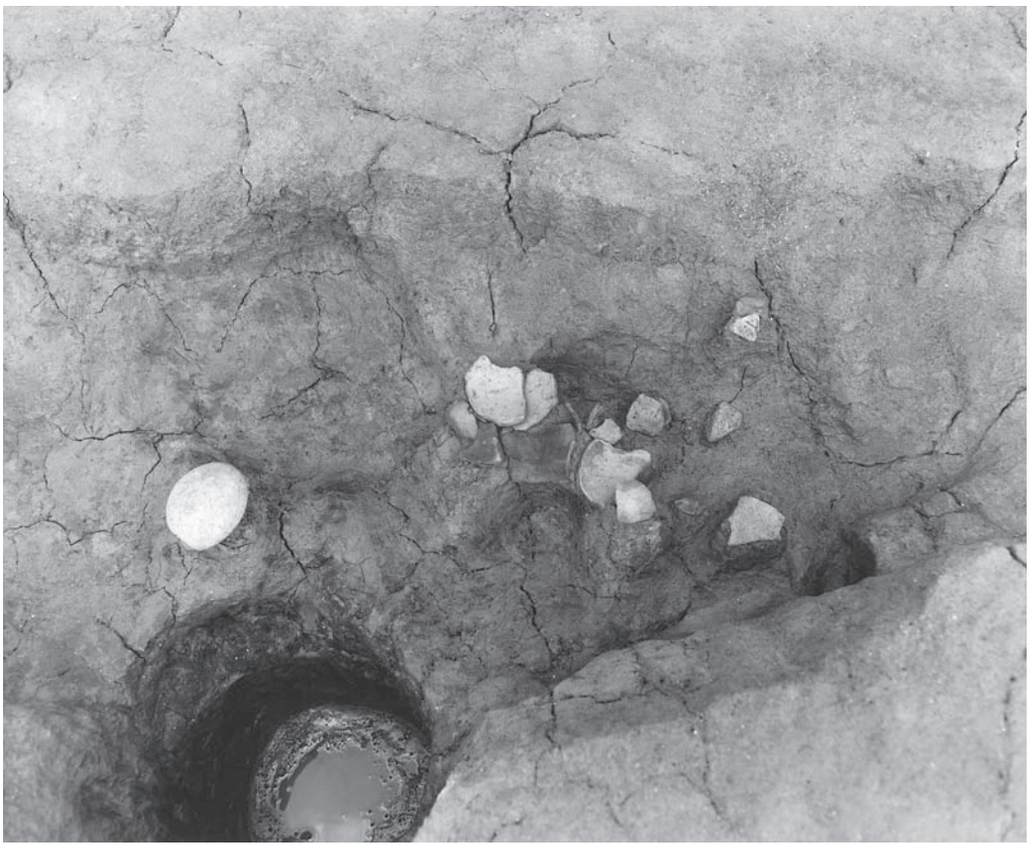
2．炉２出土状況（西から）

3．炉３

4．炉４？（南から）



1．SD06溝出土状況（北から）

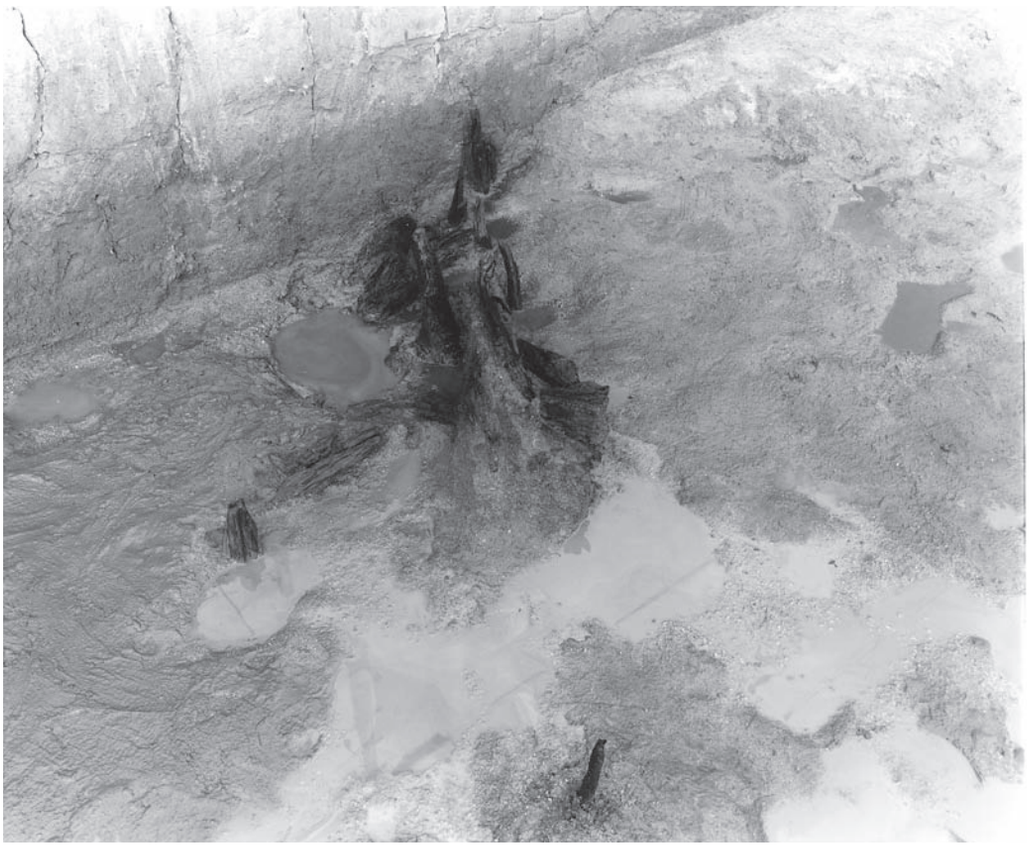


2．SD14溝遺物出土状況（南から）

1．SD17溝出土状況（南から）

2．SD17溝出土状況（北西から）

1．SD17溝しがらみ出土状況（東から）



2．SD17溝しがらみ出土状況（西から）

1．SD17溝しがらみ出土状況（南から）

2．SD17溝しがらみ出土状況（北西から）

1．包含層土器類出土状況（南西から）

2．包含層土器類出土状況（北東から）

報告書抄録

書名	仲島遺跡１		
副書名	－第２次調査報告－		
巻次	１		
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書		
シリーズ番号	1037集		
編著者名	横山邦継		
編集機関	福岡市教育委員会	発行機関	福岡市教育委員会
発行年月日	20090323	作成法人ID	40134
住所	〒810-8621　福岡市中央区天神1-8-1	電話番号	(092)711-4667
遺跡名ふりがな	なかしま		
遺跡名	仲島遺跡		
所在地ふりがな	ふくおかしはかたく		
所在地	福岡市博多区井相田1丁目10-2		
市町村コード	40135		
北緯	33° 33′ 20″	東経	130° 27′ 58″
調査期間	1983.07.04～1983.09.11	調査面積	1,060／1,645
調査原因	倉庫建設	種別	集落
主な時代	古墳時代末期　奈良時代前期　平安時代前期		
遺跡概要	古墳時代末期 奈良時代前期 平安時代前期－溝		
特記事項			

仲島遺跡１
－第２次調査報告－
福岡市埋蔵文化財調査報告書第1037集
2009年3月31日

発行　福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1－8－1
電話　092-711-4667

印刷　ダイヤモンド印刷株式会社
福岡市東区松田3－9－32
電話　092-621-8711